
プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

ALST G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

【Nコード】

N6079X

【作者名】

ALSTG

【あらすじ】

400年前、地球には数多のプリキュアがいた。しかし、あるプリキュアの出現によりほとんどのプリキュアが消えてしまった。そう、最強のプリキュアが倒されてしまったからだ。しかし、そのプリキュア達の活躍により最強のプリキュアは消えたかに見えていた。しかし、400年後、そのプリキュアは何者かに甦ろうとしていた。この物語はこの世界に生きるプリキュア達が400年前に消滅されたはずの最強のプリキュアに立ち向かう戦いの物語である。

プロローグ（前書き）

最初のモチーフはあの大戦です

プロローグ

今より400年前、初代砂漠の使徒の幹部、サラマンダー男爵がデューンの怒りを買って、追放された後、キュアアンジェによってモン・サン＝ミシエルの礼拝堂に封印されてから、数カ月後、知られていない戦いが起きていた。

舞台はフランス

この時代のプリキュア達とはある敵と戦おうとしていた。それは・

「はあああ！！！」

『バキィ！』

「ザケンナアアアア！」

黒い衣装を纏った茶髪のプリキュアは、後の時代に現れるザケンナーと戦っていた。そのザケンナーを黒い光の拳で吹き飛ばした。それをフォローするのは白い衣装を纏いし黒髪の少女とピンクの衣装の金色の少女。白い衣装の少女は自身より大きい相手の拳をいなし、それを柔軟な体を使って脳天に叩きつけられた。ピンクの衣装の少女は怪物たちの攻撃を光のバリアで遮断し、今度はその光で怪物の動きを封じた。

「てりやあああああ！」

別の場所では赤紫の衣装を纏った茶髪のプリキュアは後の時代に現れるウザイナーと戦っていた。そのウザイナーを精霊の力を込めた拳で吹き飛ばし、さらに

「逃がさないよ」

茶髪のプリキュアが高く飛びたつと同時に光を纏い、瞬時に黄緑の衣装へ姿を変えた。そして上空に待機している水色の羽衣を纏ったポニーテールのプリキュアに合流し、ウザイナーに月の光とカマイタチを放ち、ウザイナーを消滅した。

「はあああああ!!!」

違う場所では、蝶と薔薇の意匠を取り入れたピンクの衣装のプリキュアがコワイナーと戦っていた。その周りには赤い衣装を纏ったシヨートヘアのプリキュア、黄色の衣装を纏った髪をシニヨン風にしたプリキュア、緑の衣装を纏ったボブカットのプリキュア、青い衣装を纏ったポニーテールのプリキュアが戦っていた。

「まったく、これだけの敵を用意するなんて、相手は相当の自信があるみたいですね」

「そうね、全く何を考えているのかしら」

赤と青のプリキュアは大量の敵を見てぼやいていた。一方の黄色と緑のプリキュアは

「敵が多すぎて抑え切れません」

「でも、私達が何とかしないと」

しかし、それも大量の物量には抑えきれず、一気になだれ込もうと
していたその時

「はあ!」

突如、地面が揺れ、周りにクレーターを造られ、コワイナーとホシイナーは転倒した。

「全く、油断しすぎよ」

「ごめん」

ピンクのプリキュアに説教を言っているのは胸に青い薔薇の飾りをつけた紫のプリキュアだった。

「けど、これだけの敵がいるなんて驚いたわ」

「でも大丈夫。みんながいるから」

「そうね、けどあんたらしいわ」

会話が終わると四人のプリキュアと共にコワイナーとホシイナーの大軍の所へ向かった。その一方では

「……トリプルプリキュアキイイイク……」

ピンクの衣装を纏うツインテールのプリキュアと青い衣装のサイドポニーのプリキュアと黄色の衣装のショートのプリキュアがナケサケーベと言う怪物を三人がかりの飛び蹴りで吹き飛ばした。しかし、大量の怪物の前に苦戦を強いらせていた。

「周りは敵だらけ。何とかならないの」

弱気になる黄色のプリキュアに青いプリキュアの叱咤がはいる。

「諦めないで！何とかなるから」

「そうだよ。私達は負けないから」

ピンクのプリキュアが青いプリキュアの言葉に続いて言葉を言った
その時、いないところから人の声がした。

「その通りよ。まだ私達は負けていない」

いったのは赤い衣装を纏ったピンクの長髪のプリキュアだった。

「アカルンの力を使えば、先行しているプリキュアの所へいけるわ」

「じゃあ、それを使って早く、あそこへ行こうよ」

「そうね、けど、これだけの敵を何とかしないと」

「そうだね。でも、この状況きつと切り抜けるって私信じるから」

四人のプリキュアはナキサケーベ、ソレワターセの大軍に戦いを挑むのだった。そして、最前線では

「てええええりや！！！」

マゼンタのツインテールのプリキュアがネガトーンを相手に奮闘をしていた。

「もう、突っ込みすぎよ」

「けど、何とかしないとこの辺は滅茶苦茶になるわ」

マゼンタのプリキュアに呆れる白のプリキュアを尻目に青いプリキュアはこの状況を冷静に見ていた。

「けど、ゆだんはダメよ」

「もうすぐ、他の皆もここへ来ますから無理をしないでください」

そこに藤色の花のプリキュアと金色の花のプリキュアがマゼンタのプリキュアの所へたどり着き、白と青のプリキュアに話しかけた。そして遅れて水色の花のプリキュアとピンクの花のプリキュアが到着した。

「もう、強すぎよ。デザトリアンをたった一人で片付けるなんて」「けど、それだけ頼りになるんです。ですが少し無理をしています」

水色の花のプリキュアとピンクの花のプリキュアが心配している中、背後からデザトリアンが大量に現れた。

「やばっ！こんなに出てくるなんて」「油断しすぎです！ですが周りには仲間がいます。何とか切り抜きましょう」

動揺する水色のプリキュアだが、ピンクのプリキュアの言葉で冷静さを取り戻した。

「なんとかやるっしゅ！懸って来なさいデザトリアン」

水色のプリキュアの号令にデザトリアンに挑むプリキュア達

「全く、何で冷静にならないかしら」

「無理ありません。ですが、彼女はこれで良いんですから」「そうね」

呆れる藤色のプリキュアを金色のプリキュアがフォローをし、そして・・・

プリキュア達の奮戦により怪物たちは倒された。しかし、消耗は大

きかった

「きつつ〜い」

「もう、疲れた〜」

「もう、動けないよ〜」

疲れているプリキュアを知り目に突如なぞの声がした。

???「やれやれ、へたれすぎだよ君達」

疲労状態のプリキュアの前に謎の小動物が現れた

「ヌール、貴方の仕業だったの」

ヌール「その通り、この時代のプリキュアの力、見せてもらったよ。けど、もう充分だよ。ここで消えてもらうよ。もう出てきてもいいよ」

小動物の声に現れたのは一人の少女だった

「どうして、彼女が」

ヌール「さあ、君の力でプリキュアを倒して最強になるんだ。そうすれば、この世界は守られる、さあ、やるんだ」

???2「そうはさせない」

謎の声に驚くヌール

ヌール「うわっ!?!びっくりしないですよ。君が現れるかと思ったよ
キュアミネルバ」

ミネルバ「ヌール、貴方達の好きにはさせないわ」

そう言うと、周りにはたくさんのプリキュアがいた。そこには黒い花のプリキュア、緑の衣装を纏った緑の長髪のプリキュア。手にメダルを持つ紅いプリキュア、緑と黄色の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、赤と青の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、橙と紫の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、藍色の衣装に星を模った髪飾りを持つプリキュア、青と紫の軍服風の衣装を纏い、二丁拳銃を持つプリキュア。マントを纏う天使と騎士を模した衣装のプリキュア、結晶の小手を持つ、橙色のワイルドな雰囲気のプリキュア、マゼンタの衣装を纏い、カードを手にしたプリキュア。宇宙の力を宿し、黒を基調とし、銀色の髪のプリキュア。銀色の鎧をまとい、ヘルメットを装着したプリキュア、真紅のドレスを纏い、炎の扇を手にしたプリキュア。乳白色の衣装に鏡を持ったプリキュア。銀色の鎧を装備し、小手をもった金髪のプリキュア。さらに純白のドレスを纏い、シンバルを手にしたプリキュア。青い衣装に右手に長剣をもったプリキュアなどといったプリキュアたちだった。

ヌール「ほう、こんなに仲間がいるなんて驚いたよ。けど、彼女の敵ではないよ」

ミネルバ「彼女？」

ヌール「そう、僕が契約したプリキュアなんだ。僕についてくれば世界は思うがままだよ」

ヌールの言葉に怒りを覚えるミネルバ

ミネルバ「ふざけるな！プリキュアは私利私欲で使うべき物ではない！止めるんだ、お前はそんな奴の好きにしてもいいのか」

ミネルバの言葉を知り目に謎の少女は感情なく言った

「???「何でそんな事を言うの?ヌールは私を信じてくれたのよ。邪魔しないでよ」

ミネルバ「くっ、もうあいつの操り人形になってしまったか。仕方ない、攻撃を仕掛けるぞ!全員突撃せよ!」

ミネルバの号令に掛け、攻撃を開始するプリキュア達。それを疲労状態のプリキュアは歯がゆく見ていた。

「私達、何も出来ないの?」

「彼女が私達の敵になるなんて・・・」

「悔しい、何とかならないの・・・」

無力感にひしがれるプリキュア達、そんな状況を戦っているミネルバはある事を言った。

ミネルバ「貴方達、撤退して。ここは私達が何とかするわ」

ミネルバの言葉に反論する黒い衣装のプリキュア

「どうしてなの!なんで私達が撤退しなければならないの!?私達は戦えるよ!」

ミネルバ「ダメなんだよ!」

「・・・」

ミネルバ「今の貴方ではヌールはおるか、彼女には勝てないんだ。だから、撤退して」

「でも・・・」

ミネルバ「大丈夫、私にはあれがある。そして、近い未来、貴方達の力を受け継いだプリキュアがきつとあいつを倒してくれるはずだ。だから、今は逃げて。そして貴方達はこれからの時代に必要なんだから」

ミネルバの言葉を聞き、黒い衣装のプリキュアは決意する。

「今は撤退しよう。いつか、ヌールを倒すために」

「わかったわ」

「ここは撤退しよう」

撤退を決意するプリキュア達、その一方で、

ヌール「仲間を撤退するなんて余裕だね。けど、持つのかい」

ミネルバ「いいえ、充分よ。みんな！」

一同「うん」

ミネルバ「私たちの力で世界を守るのよ」

そういつとミネルバ達は光に包まれ、そして

ミネルバ「奇跡の光よ。悪しき者を消し去れ！」

ヌール「こんなのって認めないよー！ー！」

ミネルバ達の光によって、ヌールと謎の少女は消滅した。かくしてプリキュアたちによって世界は平和になった。ミネルバを初めとする数多のプリキュアの犠牲によって

しかし、それは戦いの序章に過ぎなかった。

プロローグ（後書き）

そして、舞台は400年後へ

始まりは星海市より（前書き）

物語は現在へ

始まりは星海市より

400年後、舞台は日本のとある都市、星海市より始まる。

きれいな海が臨む、煌びやかな街、星海市。ここは、400年前、ある伝説の戦士たちがここへ暮らし、その後、あらゆる世界へ渡ったといわれている。曰くつきの街である。
そんな街のストリートにある三人はここへ来ていた。

???1「ここが星海市か、大都市なのにきれいな街だね」

茶髪のロングヘアの少女の名は北条響。メイジャーランドに伝えられた伝説の戦士、スイートプリキュアの一人、キュアメロディである

???2「珍しいわね。響が食べ物以外に興味が湧くなんて、明日は雨でも降るのかしら？」

響「奏、それどういう意味？まあ、この街のお菓子の気になるけどね・・・」

響をからかったのはオリブグリーンの髪の少女、南野奏。彼女もまた伝説の戦士、スイートプリキュアの一人、キュアリズムである。
そして、

???3「まったく、二人共はしゃぎすぎよ」

猫?「そういうセイレーンだって、この街へ来てから嬉しく笑っているんじゃないか」

エレン「まあ、否定しないわハミィ。だってこの街の雰囲気、マイナーランドにはないから」

ハミィ「確かにそうニャ。ここは何となくメイジャーランドを思い

出しそうな雰囲気ニヤんだし」

響と奏の掛け合いに呆れていた少女は黒川エレン。本来の姿はセイレーン。かつては響や奏達の敵、マイナーランドの幹部であり、マイナーランドの歌姫であった。しかし、大事な友達であるハミイを救いたいと言う思いが、彼女を三人目のプリキュア、キュアビートとして覚醒したのだ。

そして、そのエレンに話していた猫みたいな生物が、エレンの友達であるハミイ。彼女はメイジャーランドの妖精であり、歌姫である。そんな彼女達が、何故この街へやって来たのかと言うと・・・

????4「響、奏、エレン。こっちだよ」

響「あっ！ラブじゃない」

響達を呼んだのは桃園ラブ。そう彼女もまたプリキュアである。最も彼女はメイジャーランドではなくスウィーツ王国に伝わる伝説の戦士、キュアピーチである。

ラブ「待ってたよみんな。さっ、今から星海市の街へ観光へ行くよ」
響「ちよつとラブ、引つ張らないで」

ラブに無理やり連れてかれる響。そんな状況を三人の少女が見ていた。

????「もう、ラブったら。響達に出会えたからってこんなにはしやいじゃって・・・」

????「仕方ないよ美希ちゃん。だって、私達もエレンと初めて会ったから」

????「そうね。私も前からメイジャーランドやマイナーランドの人、一度でも会って見たかったの」

美希「そうなのせつな？」

せつな「そうよ。ラビリンスが總統メビウスに支配されていた頃は、他の世界の交流がなかったの。それに」

美希「それに？」

せつな「エレンと言う子がどうも気になるの」

美希「そっか。エレンって子。昔のせつなを思い出すからなの」

せつな「そうよ」

「???」「そうなんだ。それだと、何かほっとけないよ。じゃあ、これを機にエレンちゃんと仲良しにしましょ」

美希「仲良くか、それもそうねブッキー。今日は響達に観光を付き合いましょ」

ブッキー「そうだよ。今日は思いっきり楽しもうよ」

この三人の少女、蒼乃美希、山吹祈里、東せつな。彼女達はラブをリーダーとするダンスユニット、クローバーのメンバーであるが、彼女達にはもう一つの姿があるのだ。それはスウィート王国に伝わる伝説の戦士、キュアベリー、キュアパイン、キュアパッションである。ただし、東せつなだけはラブ達の世界の人間ではないのだ。彼女は先に出たラビリンス出身の少女であり、彼女もまたかつてはラビリンスの幹部、イスとしてラブ達と敵対していたのだ。しかし、總統メビウスによって規定された寿命が縮められ、ラブとの最後の戦いで寿命がなくなり、それをアカルンによって生き返り、キュアパッションとして転生した過去があった。そのため、せつながエレンの事を気にするのも無理はないのだ

さて、ラブがはしゃいでいる間である動物はラブのバッグの中であちこち動かされていた。そんな事態にその動物はラブに文句を言ううとしていた。

「???」「ちよっ、ピーチはん。はしゃぐのもええけど、すこしはわ

いの事、大切に扱わんかい！」

その動物の声を聞き、我に返るラブ

ラブ「あつ、ごつめ〜ん。タルトの事忘れてた」

タルト「忘れてたつて、幾らなんでもあかんやろピーチはん。少しは人のこん考えんかい」

ラブ「本当にごめん。後で星海市にあるドーナツショップにも寄るから」

タルト「まあ、ええけど。もう乱暴に扱わんよう気をつけてくれへんか」

タルトの存在に気づいたエレンはラブの方に近づいた。

エレン「ねえラブ？なにこのイタチは？」

タルト「イタチとは失礼や！わいはなスウィーツ王国の105番目の王子、タルトや！」

エレン「王族？」

タルト「そや！ちなみにわいはパルミエ王国のココはんやナッツはんとは知り合いやで。あとカオルちゃんという兄弟分もおるで」

ラブ「そうなのよ。王族の関係者は多いのよ。あと、メップルとミップルも王族に入るから」

エレン「あのイタチ、知り合いが多いんだ」

タルト「だから、イタチちゃうわ」

響「もうエレン。からかうのはそれくらいにしてよ。ラブが困っているじゃない」

ラブ「いいよ、気にしてないから」

響達の会話を見ていた奏はすこし寂しさを感じていた。

奏「もう、二人共。何をしているのよ。私達も早く行動しないと、
って何あの動物」

奏の前に現れた謎の生物。それはまるでぬいぐるみみたいな物が浮遊していたのだ。そして奏での前で可愛らしい声を発するのであった。

????「プリップー」

その声を聞いていた奏はとんでもない行動を起こしてしまう。

奏「かつ」

????「キュア？」

奏「かわいい〜」

????「キュアー！」

奏の意外な行動に驚くハミィ

ハミィ「奏、おちつくニヤ」

奏のとんでもない行動で悲鳴をあげるぬいぐるみらしき生物。その事態に気づいたブッキーはシフォンの所へ向かった。

ブッキー「ちょっと奏ちゃん、ダメだよシフォンちゃんを泣かしちゃ」

奏「えっ、この動物、シフォンって名前なの？」

ブッキー「そうなの。シフォンちゃんは今幼児くらいなの。けど泣かすのは良くないよ」

ブッキーの説教を聴いて我に返る奏

奏「御免なさい。我を忘れてこんな事をしてしまつて」
ブッキー「いいのよ。何かシフォンちゃんも奏の事、気に入っているみたいだし」
奏「そうなの？」

そんな騒ぎの中で美希は響達にある事を知らせた

美希「みんな、もう騒ぎはそこまでにしないで。今日は観光をしながら、他の仲間にあわなきゃならないのよ」

エレン「えっ、他にもいるの？」

美希「そうよ、どんな人かは後のお楽しみよ。行きましょ」

この騒ぎの中でも響達は上手く行っていたかのように見えていた。しかし、そんな騒ぎの裏で、あるおもちゃ店では、謎の動物がとある白いライダーの玩具の前でつぶやいていた。

「???」星海市、どうやら僕が求めていたはずの人間がここにいる街。さて、彼女を呼ぶため、少し遊んで見ようか」

そう言う謎の動物から黒い光が放ち、白いライダーの玩具に入っていた。

既に悪意は動き始めようとしていた。

始まりは星海市より（後書き）

次はエレンと同じといわれるあのメンバーパートです。

白いライダーは言うまでも無く現在放送中のあの作品です。
その白いのがスイート組とフレッシュ組の最初の相手です。

博物館の出会い（前書き）

エレンと同じと言えるキャラ。それは美々野くるみの事
そう、G o G o組とS Sの話である

博物館の出会い

響達がラブと一緒に行動を始めようとしていた頃、星海市の中心部にある博物館。通称スターオーシャンミュージアム。

その中では、六人の少女と二人の青年と一人の少年が博物館の中を見学していた。

そして、広間の一角ではしゃぐピンクの髪の少女の行動を茶髪のシヨートの少女が抑えようとしていた。

???「こら、のぞみ！はしゃぎすぎないで！」

のぞみ「だって、りんちゃん。この博物館、色々ありすぎてどれを見るべきか迷っちゃうもん」

りん「そりやそうだけとね。でもね、のぞみ。はしゃぎすぎて他の人に迷惑をかけるのはよくないんじゃないの」

のぞみ「そうだけと」

今のピンクの少女は夢原のぞみ。彼女はパルミエ王国に伝わる伝説の戦士、プリキュア5のリーダーであるキュアドリームである。

そののぞみの行動をいさめようとした茶髪のシヨートの少女は夏木りん、のぞみの幼馴染であり、プリキュア5の一員、キュアルージュである。

そんな二人の行動を紫の少女と茶髪の少年は呆れて見ていた。

???「まったく、のぞみったら。相変わらずはしゃいじゃて」

???「そういうのもむりないだろくるみ。この博物館はこれだけいい物が揃っているからな」

くるみ「シロップ、確かにそうだけど」

シロー「それに今日は休日だから人が集まるんだ。にぎわっているのも仕方ないだろ」

シローとなのる少年。本来の名はシロップで人間時の姿は甘井シローと名乗っている。彼は運び屋の仕事をやっている少年である。普段は後で触れるナッツハウスで同居しており、学園が開いている間は、サン・クルミエール学園の食堂で働いている。彼はキュアローズガーデン出身だったが、エターナルの上層部、アナコンデイのいざこざに巻き込まれ、一時はキュアローズガーデンに関する記憶を失っていた過去がある少年である。

ちなみに彼は人ではない。本来の姿はオレンジのペンギンに似た姿であり、さらに大きいツバメに似た姿になれるのだ。ちなみに彼はうらの事を気にしている。

そして、そのシローに話しかけた紫の少女は美々野くるみ、彼女はのぞみ達の学校、サン・クルミエール学園に通う生徒である。普段は後で触れるナッツハウスに暮らしている。しかし、彼女はのぞみ達の世界の人間ではない。彼女はパルミエ王国の準お世話役、ミルクであり、本来の姿は白いロッピーの兎のような姿である。彼女は本来は後で紹介するココやナッツの様に人間になれるのは出来ないが、のぞみ達がパルミエ王国へ来訪している時にエターナル幹部の一人、ネバタコスの襲撃が起こってしまうが、その騒ぎの際に青い薔薇の種を拾い、その薔薇の種を育てていた。その時にミルクは青い薔薇の光を浴び、人間になれる能力を得るようになった。だがそれだけではない。その青い薔薇の光の力により、彼女はプリキユアと同じ力を持つ戦士、ミルキローズへ変身するようになった。彼女もまた、プリキユアの一員でもあるのだ。

くるみ「それもそうね。この博物館は前からナッツ様が行きたかった場所だから仕方ないかも」

???「のぞみがはしゃいでいたり、ナッツがココへ行きたかったのも無理ないだろくるみ。ここは色々な物が集まっているからな」くるみ「ココ様。確かにこの博物館はいろんな物が集まっているみ

たいね。けど、シロップにはちょっと複雑かな」

ナッツ「確かにそうかもしれないな。確かシロップは一時はエターナルの所で働いていたからな。だが、エターナルも今は完全に崩壊したから今は気にしていないみたいだぜ」

ココ「エターナルがない今はシロップもつらい思いはせずに済んだんからな。もう、過去は振り切ったんだ」

くるみ「そうね」

（でも、私は最初の頃は色々迷惑をかけていたわ。私のトラブルのせいでかれん達がバラバラになってしまったり、カワリーノの策略でドリームコレットが奪われてしまったり、初めの頃はのぞみとは争いが遭ったわ）

心の中では憂鬱になるくるみだったが、そんな彼女に青い髪の少女が声をかける

???「気にしすぎよくるみ。私だつてのぞみに会えなかったら、私はずっと一人だったかもしれないわ。それにかつての私にも会った事があるから」

くるみ「かれん」

かれん「くるみ、誰だつて人は嫌な過去があるの。私だつて嫌な過去に押し潰されてしまった事があるの。でも、のぞみやこまち、うらやりんのおかげで助けられた事があるの。勿論くるみ、貴方もよ」

くるみ「そうなの、かれん？」

こまち「そうよくるみさん。かれんには、くるみさんに救われたところがありますから」

くるみに話をかけていたナッツと言う青年はのぞみの世界とは別の次元にある世界の一つ、パルミエ王国の国王の一人である。人間の時の名は夏。普段はサン・クルミエール学園の近くの池の畔にある

アクセサリーショップ、ナッツハウスの店長をしている。出会った当初は、のぞみ達に不信を抱いていたが、当時、パルミエ王国を滅ぼした悪の組織ナイトメアに立ち向かうのぞみ達の行動を見て考えを改めた。王国一の読み手であり、多くの書物に精通している人物である。後で紹介する秋元こまちはナッツに恋心を抱いているのだ。ちなみに本来の姿はりすに似た生物である。

そして、ココと名乗る青年もまた、のぞみの世界とは別の次元にある世界の一つパルミエ王国の国王の一人である。人間の時の名は小々田コージ。彼は普段はサン・クルミエール学園の教師をしている。彼もまた、ナッツハウスで暮らしている。のぞみが恋心を抱いている相手であり、くるみにとってはナッツと並ぶ尊敬する人物である。その為、くるみはのぞみに対していがみ合ってしまう原因は彼の存在があるが、実際は仲が悪くない。どちらかと言うとけんか友達みたいな関係である。ちなみにココの本来の姿はスピッツ犬に似た生き物である。

くるみに声をかけた青い少女は水無月かれん、彼女はサン・クルミエール学園の生徒会長であり、山や島に別荘を持つ大富豪の令嬢である。くるみにとっては姉のような存在ともいわれている。そして、彼女もまた、プリキュア5の一人、キュアアクアである。

そして、水無月かれんの親友である秋元こまちはプリキュア5の一人、キュアミント。小説家になる事を目標としているおっとりとした性格の少女である。ただし、人には理解できない行動に走ったり、料理に隙あらば羊羹を入れようと企む困った性格の持ち主である。そしてこまちはナッツに心を惹かれているのだ。

こまちがくるみに話をかけようとしている所を黄色のツインテールの少女がくるみ達の所へ近づいてきた。

???「すいません、来るのが遅くなってしまって」
くるみ「遅いじゃない、うーらら」

黄色のツインテールの少女の名は春日野うらら。六人の少女の中で一番年下であり、女優になる事を夢見るアイドルである。そして、彼女は、プリキュア5の一員、キュアレモネードである。

うらら「ちよっと、来る途中であの二人に出会いましたから」

そこへのぞみとりんもうららの所へ近づいて来た。

りん「うらら、遅いじゃない。どうしたの？」

のぞみ「うららも今来たの？」

うらら「ちよっと別行動をしていたんです。のぞみさん達の所へ戻ろうとしている時に二人に会いました」

のぞみ「あの二人？」

うらら「はい、この人です」

うららが連れてきたのは茶髪の元気そうな少女と紫の大人しそうな雰囲気少女だった。しかし、のぞみはその二人の事をすぐに気づいた。

のぞみ「うわっ！咲ちゃんに舞ちゃん。あなた達もここへ来たの？」

そう、のぞみに声をかけた二人の少女。茶髪の少女は日向咲、泉の郷に選ばれた伝説の戦士、花の戦士キュアブルームと月の戦士キュアブライトである。彼女は夕凧中学校のソフトボール部のエースである。

紫の大人しそうな少女は美翔舞、彼女は日向咲と同じ泉の郷に選ばれた戦士、鳥の戦士キュアイーグレットと風の戦士キュアウィンディである。

彼女達はプリキュアにしては珍しい二つの形態を持つプリキュアで

ある。そう、彼女達もまた、のぞみ達に面識があり、現在ここへ向かっているラブ達や響達にも面識があるのだ。

咲「あつ、のぞみ達もここに来てたんだ。こんな所に出会うなんてうれしいナリー」

りん「まったく、咲も相変わらずね。まつ、元気なのが咲のいい所なんだから」

舞「もう、咲ったら。それにしても偶然ね。こんな所でみんなに会えるなんて」

こまち「あいかわらずね舞さん。でも、他のみんなももうすぐここへ来るから」

舞「どういう意味ですか？」

かれん「今、ラブ達と響達がこちらへ向かっているの」

くるみ「それだけじゃないの。今、なぎさ達やつばみ達もここへ向かう予定なの」

咲「ひよつとして、ここで待ち合わせの予定があるの？」

のぞみ「そうだよ。博物館の前の広場で集合するの。来たらきつと驚くよ」

りん「そりゃ、そうでしょ。もしかしたら、ちゃっかりあの小学生も来てたりして」

咲「小学生？」

くるみ「何か、響達のいる町、加音町で、黒いプリキュアの正体が小学生ではないかと噂されているの。ナッツ様が作っておいたミルキイノートの検索機能で調べているけど、中々正体が解らないの、ある人はスイーツ部の部長とか」

りん「私と同じ、フットサル部の部員じゃないとか」

舞「なんでりんさんが割り込むの？」

りん「悪い悪い、私もフットサル部の練習試合の時に加音町へ行った事があるの。その時にミューズの正体と噂されている人に会った事があるのよ」

のぞみ「そうなんだ。りんちゃんすごいよ。もしかしたらミューズの人に会えたかも」

りん「そうかも知れない。けど、でも確証がないんだ」
うらら「やっぱり、証拠がないのですか」

りん「そう、何か確定になりそうなのがないのよ」

少女達が会話に夢中になっている時、大人しくしていたシロップは口を開いた

シロップ「お前ら、会話に夢中になるのはいいけどよ、後ろ詰まってるぞ」

のぞみ「うしろ？って、うわっ！」

のぞみ達の後ろには人が詰まっていた

咲「人、たくさんいるナリ・・・」

くるみ「は、早く行きましょ・・・」

後ろの人ばかりを見たのぞみ達はやく次の場所へ進むのであった。しかし、ココとナッツだけは違っていた

ココ「・・・」

ナッツ「どうしたココ？」

ココ「おかしい？誰かに見られているような気がするんだ」

ナッツ「気のせいだろ」

ココ「気のせいか。ならいいが」

（何かいるようなのに、いない気がする。何故だ？）

ココ達が不安を抱いてる頃、博物館の一角、大航海時代の展示会場では謎の生物が海賊船の模型を見ていた

「??? 海賊船か。何か利用価値あるな。そうだ、ジェット機とレ
ーシングカー、トレーラーと潜水艦と合成して強いのが創ろうか。後
はドラゴンの模型とパトカーとライオンの剥製と武者人形と忍装束
とレースカーも利用するか」

その生物は海賊船に黒い光を浴びせると、すぐにこの場から消えて
いった。この海賊船がのぞみ達に災いをもたらす事を知らず

博物館の出会い（後書き）

この海賊船もまたやばいフラグ。
そして、いよいよ、あの二組が来ます。

動物園の出会い（前書き）

のこる二組、MH組とHC組登場

動物園の出会い

のぞみ達と咲達が博物館で見学している頃、星海市の中心地に近い動物園では園内の時計がある広場で待ち合わせをしている三人の少女がいた。

???

「遅いですねつばみさん達。そろそろ来てもいい時間ですが、どこへ寄り道をしているのでしょうか？」

???

「ひかり、ここは広いから多分つばみ達は迷っているルル」

広場で待ち合わせをしている金髪のお下げの少女は九条ひかり。普段は藤田アカネのいとして「T A C O C A F E」で手伝いをしながら同居している、一見大人しそうに見える少女であるが、彼女の正体は光の園のクイーンの「生命」にあたる存在である。彼女はなぎさ達の交流によって、クイーンの力を取り戻し、ジャアクキングとの最後の戦いでは、クイーンとして覚醒していった。そして、ジャアクキングを倒した後はクイーンとは別の存在としてなぎさ達の元へ戻って来た。

そして、ひかりに抱きかかえているぬいぐるみみたいな物はルルン。彼女は光の園からやってきた「未来を紡ぐ光の王女」である。普段はコンパクト型のアイテム「ミラクルコミュニケーション」の姿をとっている。

その近くには、黒髪のロングの少女と茶髪のショート少女がいた

???

「そう言うのも無理ないわ。星海動物園は広い上に、近くには植物園。少し歩くけど水族館もあるからね」

???

「それもそうだね。こんだけ広いと迷った時、大変な事になるから」

黒髪のロングの少女は雪城ほのか、彼女は光の園に伝わる伝説の戦士の一人キュアホワイトで。足技や回転系の技を得意とし、柔軟な体を生かし、敵をいなす合気道系の技を使う技巧派の戦士である。

茶髪のショート少女は美墨なぎさ。彼女は光の園に伝わる伝説の戦士の一人、キュアブラック。彼女は自身のパワーを活かし、強烈なパンチやキックで戦い、その破壊力は、ミルキイローズには劣るが強力である。この二人は全プリキュアの中では最も体術に優れたプリキュアである。しかし、彼女の前には歴戦の戦士とも言えるプリキュアがいた。その人は既にここへ来ていた。

???

「その通りよなぎさにほのか。のぞみだったら迷いかねないわ」
ほのか

「ゆりさん、それは言いすぎですよ」

なぎさ

「それにのぞみがいたら、怒りそうですよ」

ゆり

「そうね、流石にそれはないから・・・」

なぎさ達に話しかけたのは月影ゆり。彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士の一人、キュアムーンライトである。三年前に父が行方不明になった後、プリキュアとして選ばれ、たった一人で砂漠の使徒と戦っていた。しかし、プリキュアパレスの試練に向かう時に、サバーク博士によって作り出されたプリキュア、ダークプリキュアに襲撃され、パートナーであるコロンを失いも自身も一時は変身能力を失ってしまうが、ココロの大樹の力とコロポットによってプリキュアの種が修復され、戦線に復帰する。しかし、彼女には残酷

な運命が待っていた。ムーンライトを敵視するダークプリキュアの正体がじつはゆりの一部と実はゆりの父であった月影博士の手に作り出された、いわば姉妹のような存在だった事やサバーク博士が実の父であり、その父を砂漠王デューンによって殺され、一時は復讐鬼になりかけていたがつぼみの説得によって復讐を乗り越えていった。

そして、三人の少女がなぎさ達の所へ来た。三匹のぬいぐるみみたいな物と一緒に。

???

「なぎささんにほのかさん。遅れてしまってすいません。えりかが色々寄り道してしまって」

えりか

「つぼみ、だってここ色々見たい所が多すぎんのよ」

なぎさ

「それもそうだね。ここはいろんな物が集まるんだからね」

???

「そうですね、何かパリでファッションショーに来ていた時の事を思い出しますね」

つぼみ

「その時はサランダー男爵の事やオリヴィエの出会いとかがありましたね。そういういつきも気になる所あるのですか？」

いつき

「ええ、いくつもありますよ。ポプリもこういうにぎやかな場所が気になっていますから」

ポプリ

「今まで出かけてみたけど、星海市はなんか気にいったでしゅ」

コフレ

「そうですっ！。何か、この街はまるで心地いいんですっ！」
シプレ

「私もですっ！」

つぼみ

「そうですね。もし機会があったらファッション部の皆も一緒に連れて行きます」

えりか

「それ、いいねつぼみ。今度来る時は他の皆も連れて行こうよ」

その三人の少女。ピンクの少女は花咲つぼみ、彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士キュアプロッサム。素直で礼儀正しい御婆ちゃん子である。彼女は初変身した時は力を制御できずに振り回され、砂漠の使徒からは「史上最弱のプリキュア」と言う不名誉な称号を得てしまった事があった。

青いウェーブのロングヘアの小柄な少女は来海えりか。彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士キュアマリン。明るくマイペースなお節焼きである。ファッションモデルの姉を持ち、自身もファッションデザイナー兼スタイリストになる夢を持つ。しかし、彼女には悩みがあった。背の低さに悩まされていたからだ。もっともえりかより背の低い人が近いうちに現れれば、悩みはなくなるかも知れない。

そして、茶髪のシュートの少女は明堂院いつき。明堂学院の理事長の孫で、実家は明堂院流古武術の道場である。道場の跡継ぎになる為、学園では男装をしており、その影響で、一人称は僕である。そして、彼女もまたココロの大樹に選ばれた伝説の戦士、キュアサンシャインである。

そしてぬいぐるみみたいな物で、ピンクの装飾品を付けた方はシプレでつぼみのパートナー妖精、青い装飾品を着けたのはコフレでえりかのパートナー妖精。そして、金色の装飾品を付けたのはポプリでいつきのパートナー妖精。シプレとコフレの妹分である。

ひかり

「それは悪くありませんね。なぎささんとほのかさんもこういうの
どうでしょうか？」

ほのか

「いいわね、この提案。次来る時はそうしたいけど、なぎさは？」

なぎさ

「あたしもいいわ（でも、藤P先輩を誘ってもいいのかな・・・）」
ほのか

「なぎさ、どうしたの？」

なぎさ

「なんでもないから」

ひかり

「????」

えりかの提案にほのかとなぎさは賛成するが、ひかりは、なぎさが
何故赤面したのかを理解する事ができなかった。
そして、ゆりはなぎさ達に声をかけた。

ゆり

「無駄なお喋りはそこまでにしなさい。そろそろ、のぞみや咲がい
る所へ行くわよ。もしかしたらラブや響と合流するかも知れないわ」
つぼみ

「解っています。なぎささんも行きましょう」

なぎさ

「え、ええ」

ゆり達の号令で、集合したなぎさ達は、のぞみ達がいると思われる
博物館へ向かおうとした。しかし、その裏では

水族館にて

従業員

「おかしいな。記念品のメダルはどこ行ったんだ？」
従業員

「解りません。何処かへ紛失したようです」

水族館ではメダルが紛失する事件が起きていた。そこには、謎の小動物がメダルと動物のポスターを手にして隠れていた。

???

「メダルに動物。これを合成したらどんな物が出来るのかな」

するとメダルとポスターに黒い光を浴びせた。すると、七体の怪物が誕生した。その怪物は、とある目的で外へ出た。

動物園の出会い（後書き）

次回、戦闘開始。まずはスイート組とフレッシュ組から

予兆 フレッシュ&スイート編（前書き）

戦闘開始の前触れ。ラブ達と響達編です。

予兆 フレッシュ&スイート編

なぎさ達とつばみ達が、博物館へ行こうとしていた頃。響達はラブ達の案内で観光をしていた。

現在、響達は商店街でいろんな店を見ていた。

響「うわー。こんなに店があるんだ」

ラブ「そうなの、ここは色々な店があるの。たとえば」

ラブが右手に刺したのは楽器の専門店で、響はその店を見ていた。

響「いろんな楽器があるんだね。ピアノの他にもギターとか、太鼓みたいなものがあるなんて」

ラブ「響、もしかして楽器に興味があるの？」

響「あるけど、以前の私はそんな物には興味なかったかも知れないの」

ラブ「どういう意味なの」

何故、楽器の話をして響が暗くなるのか。戸惑うラブの元にそこでハミイと奏がやって来る。

ハミイ「それは響が昔は音楽嫌いだったからニヤ」

ラブ「音楽嫌い？」

奏「そう、響は小学校の頃、響のお父さんのすれ違いのせいで響は音楽の才能がないと思いついてしまっただけで音楽が嫌いになったの」

ラブ「そうだったの」

奏「けど、音楽に対する愛情は捨てて切れなかったの、そして、ある出来事で響は音楽への情熱は取り戻し、響のお母さんの交流で響はピアノリストになるという夢を得たのよ」

ラブ「そっか。響は音楽に対してコンプレックスがあっただけど、ハミイや奏の交流があったおかげで立ち直ったんだ。よかったんじゃない・・・ってどうしたの？」

ハミイ「響と奏、ニヤアに出会った頃は不仲で酷かったんニヤ」
ラブ「どういう事？」

ラブと響が会話をしている頃、エレンは美希たちと一緒に玩具店にいた

エレン「ねえ、何でここに来たの？」

祈里「シフォンちゃんが喜ぶ玩具を探しに来たの」

そう言うときエレンをオルゴールのある所へ連れてきた

エレン「シフォンって、こういうの好きなの？」

美希「そうなの、シフォンはオルゴールの子守歌が好きなの」

エレン「子守歌か・・・。ねえ、このオルゴール、買ってもいいかな？」

美希「エレンはオルゴールに興味があるようね？いいわ、買ってもいいわ」

エレン「ありがとう」

祈里「よかったね、エレンちゃん。後はレジに支払いに行きましょう」
エレン「えっ、そうね」

エレンがオルゴールを買い、支払いに行こうとしている頃、せつなはある方向に視線を見て、立ち止まっていた。

タルト「どないしたんや、パッションはん。急に立ち止まって」
せつな「タルト、感じる」

タルト「何がでっか？」

せつな「あれを見て」

せつなが指指した先は、男子が欲しがっている特撮番組の玩具がある場所だった。そこから禍々しいオーラが発していた。

タルト「玩具売り場から一体何・・・」

せつな「伏せて！」

タルトが言いかけたところをせつなはいきなり伏せた。

タルト「な、何や今のは？」

せつな「右手にロケットを持っていた白い奴よ」

そう、タルトはロケットを持った白い奴に襲われたのだ。

せつな「まずいわね。ラブ達に知らせないと」

そういうとせつなは携帯電話でラブに連絡を入れた。その頃のラブ達はと言うと

ラブ「それじゃ、不仲になっていたのは、待ち合わせの場所を間違えたのが原因だったの？」

奏「そう、入学式の時、私は桜の木の元で待っていたけど、その時は校門の反対側にも桜の木があるのを気づかなかったの」

響「その出来事のせいで私達はしばらくは不仲になっていたの。会えば喧嘩ばかりで、初めてプリキュアになった時も息が合わないせいで、何も出来ずに負けちゃったの。しかも、初めてなったのに解散の危機に瀕したの」

ラブ「初めてなったのにプリキュアを止めるって、何か、酷すぎよ。もし、ほのかやかれん、くるみやゆりさんがいたら二人共、こっ酷

く叱られているわ」

ハミィ「その通りニヤ。実際、誤解を解いても、しばらくは喧嘩をしていたから、元の親友にもどるには時間がかかったんニヤ」

ラブ「そうだったんだ。ハミィも苦労してたんだ」

ラブがハミィ達の話をしているとき、ラブの携帯であるリンクルンから着信音が鳴った。

ラブ「どうしたの、せつな？」

せつな「気をつけて、敵が出たの？」

ラブ「敵？どこから現れたの？」

タルト「玩具売り場からいきなり出てきたんや。なんかロケットを装備した白い者に」

ラブ「白い者？それは今どこにいるの？」

ラブが携帯で話している所を響が近づこうとするが、響は奏に呼び止められていた。

響「何で止めるの奏？」

奏「だって、目の前にあれが・・・」

響「あれって、うわっ！な、何でこんな所に白い宇宙飛行士みたいなのがいるのよ！？」

響の目の前にいたのは、白い宇宙飛行士に似た格好をし、右手にロケットを携えた腰にスイッチを持った怪人だった。

ラブ「どうしたの響？なんで驚いている、って何あれ！？なんでこんな所に仮面ライ・・・」

響「違うわよ、この話には仮面ライダーフォーゼは出ないよ！」

奏「おそらく、その仮面ライダーを怪人みたいな物に変えたのよ」

ラブ「せつなの言っていたのはこれだったんだ」

ラブ達が驚いている所で、美希、祈里、せつな、エレン、タルト、シフォンが合流した。

美希「ラブ、大丈夫？」

エレン「響、奏、無事なの？」

ラブ「大丈夫だよみんな」

響「私達は大丈夫よ」

エレン「よかった」

せつな「そんな事言っている場合じゃないわ」

祈里「あの怪人がそとに出たら大変な事になるよ。何とか止めないと」

そういうとラブ達は怪人の所へ視線を向けた。

響「子供達が懂れている正義の味方を」

奏「何らかの方法で人々を傷つけるような物に変えるなんて」

エレン「人々に笑顔をもたらす者を悪い事に使うなんて」

響・奏・エレン「「絶対に許せない！」「」」

美希「その通りよ！」

祈里「みんなの笑顔を守るヒーローを悪い物に変えるなんて」

せつな「人々を不幸にするなんて絶対させない」

ラブ「だから、私達はこんな事態を止めてみせる。みんな行くよ！」

そういうとラブ達は携帯電話、リンクルンを手にして変身コードを言う。

ラブ・美希・祈里・せつな「「「チェンジ・プリキュア・ビートアップ!」」」

響「私達も行くよ!」

そういうと響達はハートコンパクトに似たアイテム、キュアモジュールを掲げ、変身コードを言う

響・奏・エレン「「レッツプレイ!プリキュア・モジュレーション!」」

そういうとラブ達と響達は光に包まれ、衣装や髪型が変化する。

ラブはピンクの衣装を纏い、髪はレモンイエローのツインテールに変化し、美希は青いツープースの衣装を纏い、髪は紫のサイドテールに変化し、祈里は黄色の衣装を纏い、髪は変化はしないが髪色は薄くなり、少しウェーブが掛かり、せつなは赤い衣装に黒いタイツ、髪はピンクの長髪へ変化し、そしてラブ達の左胸にはクローバーを模したワッペンが装着する。

響はへそを露出したピンクの衣装を纏い、髪はピンクのツインテールに変化し、奏は白い衣装を纏い、髪はレモンイエローのポニーテールに変化する。エレンは青い衣装を纏い、髪は淡い紫のサイドポニーに変化する。そして響達の胸にはキュアモジュールが装着される。

そして、華麗なる衣装を纏ったラブ達と響達は地上に降り立ち、名乗り口上を言う

ラブ「ピンクのハートは愛あるしるし!もぎたてフレッシュ、キュアピーチ!」

美希「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー！」

祈里「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン！」

せつな「真つ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」

響「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

奏「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

エレン「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

ピーチ・ベリー・パイン・パッション「レッツ・フレッシュプリキュア！」

メロディ・リズム・ビート「届け！三人の組曲！スイートプリキュア！」

今ここに邪悪なる者に立ち向かう可愛らしく強い戦士達、フレッシュプリキュアとスイートプリキュアが登場した。

彼女達は突如現れた怪物を倒すことが出来るのか？

予兆 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、戦闘開始。因みに、レッツ！フレッシュプリキュアのセリフは原作にはありません。

戦闘前編 フレッシュ&スイート編（前書き）

フレッシュ組とスイート組、戦闘開始。

戦闘前編 フレッシュ&スイート編

商店街にて仮面ライダーフォーゼに似た怪物に対峙するスイート組とフレッシュ組

ピーチ「玩具が敵になるのって、トイマジン軍団以来だね」

メロディ「トイマジンって何？」

ピーチ「ラビリンスと戦ってる時に一時はクローバーストリートにある玩具達が消える事件が起きていたの。その事件を引き起こしていたのはおもちゃの国を支配していたトイマジンと言う怪物だったの。一度は倒したけど、メロディ達と初めて出会ったブラックホールの事件で再び現れたの」

メロディ「そっか、あの時ね。私達はトイマジンとは戦っていなかったんだ。でもそういう敵が居るなんて」

ピーチとメロディはあの時の話をしていた。そしてベリー達はと言うと

ベリー「それにしてもあの仮面ライダーが私達の敵になるなんて」
パッション「それは違うわベリー。これは仮面ライダーフォーゼの玩具が何らかの理由で怪物化したのよ」

ベリー「えっ、そうなの？」

パイン「何か、ナケワメーカーかソレワターセに似ているよ」

ピーチ「確かに似ているけど、何か違う。違和感を感じるよ」

メロディ「かといってネガトーンでもない」

リズム「そうね。ネガトーンだったら不幸のメロディを発するけどそういう気配がないみたい」

ビート「一体、何かしら。あの怪物？」

ビートが思案している間にも白いライダーに似た怪物はピーチたちを襲おうとしていた

ビート「来るよ、みんな！」

白いライダーに似た怪物は右手にロケットを装備し、ピーチ達の方へ突撃しようとしていた。しかし、その怪物の突進をピーチ達は難なく避けた。

ピーチ「動きは早いけど、当たらなければ大丈夫だよ」

余裕のピーチだったがタルトは白いライダーの左手に何か光る物を見た。

タルト「ピーチはん、あの白いライダーの左手に何かを出してきおった」

ヒーチ「何かって？」

タルト「左手を見るんや」

白いライダーの怪物の左手にはアンテナらしき物が装着していた

リズム「パラボラアンテナ？」

メロディ「何するの？」

そのパラボラアンテナから光線が発射し、その光線はリズムとパインに当たる。

パイン「キャ！？」

リズム「何が起きたの？」

光線を浴びてしまったパインとリズムに駆け寄るメロディとベリー

ベリー「大丈夫？」

メロディ「リズム、平気？」

パイン「当たったけど、何ともなかったよ」

リズム「大した事ないから」

メロディ「そっか」

ベリー「ならいいけど」

光線を浴びたが何ともなかったことに安心するベリー達だが、その時パッションがあることを言ってきた

パッション「気をつけて！ミサイルが来るわ！」

ベリー「ミサイル？」

よく見ると白いライダーの怪物の右足にはミサイルランチャーが装備していた

ベリー「嘘！ランチャーを装備しているわ」

パッション「みんな避けて！」

右足のランチャーから大量のミサイルがピーチ達を襲うが・・・

ピーチ「そんな攻撃、当たるもんですか！」

メロディ「スポーツ万能、舐めないで！」

大量のミサイルを避けたピーチ達だが、避けていない人が一人だけいた

パイン「何このミサイル。私だけ避けきれない」

そして、ミサイルがパインを襲い、そして全て当たってしまう

パイン「キャアアアアアアア！」

ミサイルに当たってしまい、落ちていくパイン。落ちていくパインをピーチがキャッチする。

ピーチ「どうしたのパイン？」

パイン「私だけミサイルが全部こっちへ来てしまったの。避けたはずなのに」

ベリー「ミサイルが全部パインに、まさか！？さっきのパラボラアンテナの光線を浴びたせいで」

タルト「多分、パインはんとリズムはんに浴びせられた光線に当たてしまうと、確実に命中してしまう効果をもってしまうんや」

ピーチ「つまり、攻撃が確実に当たってしまうって事。じゃあ・・・」

タルト「多分、リズムはんも同じ効果をもってしまうとるんや」

タルトの話で顔面蒼白になるハミィ

ハミィ「まずいニヤ。メロディにビート！リズムがパラボラアンテナの光線に浴びせられているニヤ！リズムを守るんにゃ！」

ハミィの話を聞いたメロディはビートに声をかけた

メロディ「聞いたビート。リズムの方を見てあげて」

ビート「解ったわ」

その頃、ビートは白いライダーの怪物の突進攻撃を避けまくっていた

リズム「駄目っ、避けても避けても、突進が襲って来るなんて」

しつこい突進攻撃にスタミナが切れてしまっリズム、そして転倒してしまっリズムに左足にドリルを装備し、右手にロケットを装備した白いライダーの怪物の攻撃が襲おうとしていた。

リズム「しまった！」

命中されるその時

ビート「ビートバリア！」

ギター型の武器、ラブリターロッドを装備したキュアビートが音のバリアを張らせ、白いライダーの怪物の攻撃をはじき返した。

リズム「ビート！」

ビート「危ないところだったねリズム。メロディ、後はお願い」

ビートがそう言うときメロディは脚にマゼンタのオーラを纏い、白いライダーの怪物の方へ走り出し、そして、ジャンプしオーラを纏ったキックを繰り出した。

メロディ「食らいなさい！プリキュア・メロディスマッシュ！」

メロディの必殺キックを当てた白いライダーの怪物は吹き飛ばされたはずが、左手にパラシュートを出し、吹き飛ばしの速度を落とした。

ベリー「パラシュート？」

パイン「そういえばこのライダーのモチーフは宇宙飛行士だよ」
パッション「だから、パラシュートを持ってもおかしくない」
ピーチ「それだけじゃないよ。何か出してきたよ」

白いライダーの右足にはランチャーとは違う装備をしていた。その装備から大量の煙を排出してきた。大量の煙に苦しむピーチ達

ピーチ「げほっげほっ。まさか煙幕装備を出すなんて」

メロディ「これじゃ周りが見えないよ」

パイン「まずいのはタルト達だよ。どこにいるの？」

ビート「煙があつてはハミイが見えない」

大量の煙に苦しまれるピーチ達に悲鳴があがる

「???」「ニヤ——！」

「???」「こらっ離さんかい！」

「???」「助けて——！」

リズム「ハミイの悲鳴が聞こえたわ」

パッション「タルトの悲鳴に」

ベリー「シフォンの泣き声が聞こえたわ」

ピーチ「煙が晴れる。見て」

煙が晴れると白いライダーの怪物は右手にマジックハンドを装備し、ハミイ達を捕獲した。左手にはハサミを携えて。

ピーチ「しまった！」

メロディ「さっきの煙で私達が混乱している隙に、捕獲するなんて」
リズム「早く助けないと」

リズムが飛び出そうとするが、ベリーに静止される

リズム「どうして止めるの？」

ベリー「リズム、怪物の脚を見て！」

リズム「脚？」

白いライダーの怪物の右足には音響装置、左足にはスプリングのような物が装備していた。

ベリー「おそらく、これを使って足止めし、そして逃走するつもりよ。動けば音響装置で動きを封じるつもりよ」

リズム「それじゃあ、動けばハミィ達が大変な事に、どうすればいいの？」

白いライダーの怪物に人質にされたハミィ達。動けば大変な事になってしまう。窮地に立たされたピーチ達とメロディ達はこの状況を打開する事が出来るのか？

- - - - -

その頃、商店街の外では赤い髪の少女が佇んでいた

???「ここにプリキュアの気配がする。そして、あいつの悪意を感じる。貴方の好きにはさせない」

そついうと携帯電話にカギのような物を差込、ある言葉を言った

???「プリキュアチェンジ」

そして、赤い髪の少女は光に包まれた状態で、商店街に入った。彼

女の正体はいかに？

戦闘前編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回

???「派手に行つてやるわ」

今回のキーマン登場

戦闘中編 フレッシュ&スイート編(前書き)

今作のキーマン現る

戦闘中編 フレッシュ&スイート編

人質にされたハミィ達。救出を試みようとするが、白いライダーの怪人が何をしでかすか解らないために動けずにいた。

メロディ「どうするピーチ、どうやって救出するの？」

ピーチ「動けば音響装置が発動してしまう。動くだけで鉄でハミィ達を切り刻む恐れがあるわ」

悩むピーチにパッションが話しかける

パッション「なら、動かずに白いライダーに近寄ればいいでしょ」

メロディ「方法あるのパッション？」

パッション「アカルンを使つて、瞬時に白いライダーに近づける。

瞬間移動すれば音響装置を発動する前に助けられるわ」

メロディ「なるほど、いい考えね」

パッション達の会話を見た白いライダーの怪人は左手の鉄をカメラに変えた

ベリー「何で左手をカメラに変えたのかしら？」

パイン「何か目的でもあるのかしら？」

カメラが気になるベリーとパイン。そしてピーチはパッションにアイコンタクトをした

ピーチ「いい、パッション。私が合図をしたらアカルンで瞬間移動して」

パッション「解ったわ」

白いライダーの怪人は、動かずに様子を見ていた

ピーチ「気づいてない様ね。今よパッション」

パッション「頼むわアカルン」

アカルンを出そうと動き出す瞬間、右足の音響装置の衝撃波がピーチ達を襲う

ピーチ「何で！まだ動いてないのに？」

強烈な衝撃波に襲われたピーチ達は、店の壁に叩きつけられた

ピーチ「キヤア！」

メロディ「うっ！」

壁に叩きつけられたピーチ達は何が起きたのかわからずにいた

ピーチ「一体、何が起きたの？」

パッション「動いていないのに、衝撃波が来るなんて・・・」

ベリー「多分、さっき装備したカメラでパッションの様子を撮影したからよ」

パッション「私を撮影した！？」

パイン「おそらく、白いライダーの怪物は瞬間移動すると読んでカメラを出したのよ」

メロディ「それじゃあ・・・」

リズム「もう打つ手はないの・・・」

瞬間移動による救出作戦が見破られてしまい窮地に立たされるフレッシュ組とスイート組。そしてハミィ達にも危機が

ハミイ「そんなニヤ、作戦が見破れるなんて」

タルト「フォーゼ本編でもカメラは使ったんや。撮影する事によつて解析されるとは、これは厄介や」

シフォン「キュア」

そんなハミイ達に左手の鍔がゆっくり近づこうとしていた

ハミイ「ニヤ」。止めるんニヤ。ニヤは食べても美味くないニヤ」

タルト「ちよつ兄さん。わいを食用肉にするのは勘弁してくれや」

今、ハミイ達は生命の危機に晒されようとしていた。だがその時、一発の銃弾が、マジックハンドのフレームを破壊し、ハミイ達は解放された。

ハミイ「ニヤーってあれ？」

タルト「わてら無事でっせ」

危機に晒されたハミイが何者かによつて助け出された事に驚くメロディ達

メロディ「なつ何が起きたの？」

リズム「誰が助けたの？」

ビート「今のは一体？」

呆けるメロディ達の前にハミイ達を保護した赤い海賊風の衣装を纏い、赤い長髪の眼帯の少女が現れた。

「???」貴方達の大切な者、助けたわ」

ピーチ「貴方は一体？」

ピーチの疑問に赤い長髪の少女は答える

???「教えてやるわ、私の名は」

???「変革を呼ぶ自由の海賊、キュアパイレーツ」

赤い長髪の眼帯の戦士、キュアパイレーツの登場に驚くメロディ達

メロディ「キュア・・・」

リズム「パイレーツ？」

パイン「パッション、キュアパイレーツって知ってる」

パッション「知らないわ、そんなプリキュア。ただ、別の世界では様々な戦士に変身するヒーローがいたけど、そういう能力のプリキュアは見たことないわ」

ベリー「確かに」

呆けているベリー達を尻目にピーチはパイレーツに話しかけてきた。

ピーチ「ねえ、貴方は味方なの？」

ピーチの疑問に答えるパイレーツ

パイレーツ「安心して、私は味方よ」

ピーチ「味方？」

パイレーツ「そうよ。もし、信用できないなら私の戦いを見なさい」

そう言うとパイレーツは視線を白いライダーの怪人の方に向き、その白いライダーの怪人と対峙する。果たして、彼女の実力は？

戦闘中編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、パイレーツのターン。
パイレーツ「派手に行つてやるわ」

戦闘後編 フレッシュ&スイート編(前書き)

パイレーツのターン。
でも、長すぎた・・・

戦闘後編 フレッシュ&スイート編

人質にされたハミィを救ったのは赤い衣装を纏った海賊風の戦士キユアパイレーツだった。

白いライダーの怪物に対峙するパイレーツ。その手には船乗りが使う片刃の剣、カトラスに似た武器を持っていた。その武器を構え、決めセリフを言う

パイレーツ「派手に行つてやるわ」

そして、その武器を携えて、怪人の所へ走る。その白いライダーに片刃の剣、キユアカトラスで斬り付ける。

パイレーツ「はっ！」

パイレーツの剣に斬り付けられ、ダメージを受ける。しかし白いライダーの怪人は左手に盾を出して、剣の攻撃を防ぐ。

パイレーツ「盾で防ぐか。だがこっちの拳はどうか」

そういうとパイレーツは拳で盾に殴る。防いでも思わず怯んでしまふほどのパワーで仰け反る白いライダーの怪人。動きが止まったところをパイレーツは携帯電話のような物を取り出し。鍵のような物を差し込もうとしていた。

ピーチ「何、この鍵は？一体何をするの？」

パイレーツ「見せてあげるわ。私の力を」

そして、鍵を携帯電話に差込、あるコードを言う

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アユニバース』

すると、光に包まれたパイレーツは黄色のラインが入った黒い衣装を纏った銀髪のツインテールのプリキュアに変身した。
違う姿のプリキュアに変身した事に驚くピーチ

ピーチ「何、今のプリキュアは一体？」

Pユニバース「これは、違う世界に存在するプリキュア、キュアユニバース」

ピーチ「キュアユニバース？」

パイレーツ「この世界には存在しないプリキュアよ」

メロディ「存在しない？どういう意味なの？」

Pユニバース「理由は後で話すわ。今は怪物を倒すのに集中しないと」

白いライダーの怪物は、右手の鉄球を撃ち出し、ユニバースを狙うが

Pユニバース「甘いわ」

そういうと回し蹴りで鉄球を打ち返し、鉄球は何故か足元にぶつけた。白いライダーの怪物は足元に鉄球をぶつけられて、何故か痛がっていた。その拍子で音響装置とスプリングは壊された。

ビート「これって何？」

リズム「多分、タンスの角に小指がぶつけられた様なダメージを受けて痛がっているのよ」

ハミィ「何と言うギャグニヤんだ・・・」

タンスの角にぶつけられてた痛みにやられた白いライダーの怪物。
その隙にユニバースは銀の長剣、コスモブレードを召喚し、剣の切っ先に電撃の力が込める。

Pユニバース「食らいなさい。木星の大いなる力、プリキュア・ジュピターボルテージ！」

剣の切っ先に電撃の力を込めて、広範囲に電撃を放射し、白いライダーの怪物にダメージを与えた。
パイレーツの戦いに魅了されるベリー達。

ベリー「すごい」

パイン「これがパイレーツの力」
パッション「でも油断しないで。あの白いライダーの怪物の色が変わるわ」

パッションの言うとおり、白いライダーの怪物は、電気を纏った金色のライダーの怪物になった

ベリー「き、金色になった!?!」
パイン「電気を纏っているよ」

金色のライダーの怪物は左手にウィンチを装備し、ウィンチロープでユニバースを捕らえた。

ユニバース「捕縛攻撃か!」

そして、右手の電気ロッドをウィンチのロープに部分に触れさせ、電流を流した。

タルト「あかん！このままでは黒焦げや」

電流がユニバースに襲おうとするが、ユニバースの手に携帯電話を出し、緑の鍵を差し込んだ。

Pユニバース「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アエルス！』

電子音がなつたと同時に電流を当てたユニバース。しかし、次の瞬間、ユニバースは緑の衣装を纏った緑の長髪のプリキュア、キュアエルスに変身した。

Pエルス「残念だったね。そんな電流、効いてないわ」

エルスに変身した事により電流ダメージを無力化したのだ。

ベリー「今度は緑に変身した！」

パイン「一体どうなっているの？」

電流攻撃を無力化された事によって混乱する金色のライダーの怪物

Pエルス「今度はこっちの出番よ！」

そういうとエルスの周りに電流が纏い、瞬間移動をして、連続攻撃を仕掛ける。

Pエルス「はああああ！」

装備を仕掛ける暇もなくやられる金色のライダーの怪物。エルスの

電撃キックで吹き飛ばした後、エルスの手で緑のロッドを召喚する。

Pエルス「ライトニングロッド！」

そして、ロッドから緑の刀身が展開し、大剣形態に変形する。そして、さっき纏った電撃を刀身に纏い、刀身を巨大化する

Pエルス「食らいなさい！プリキュア・ライトニングスラッシャー・オーバードライブ！」

かなりの長さになった雷の刀身を持った剣を金色のライダーの怪物に斬り付ける。そして大ダメージを受ける。

パッション「他のプリキュアの力を使うとはとんでもないね」

ピーチ「パッション。今度は赤くなるよ」

パッション「赤い？」

ピーチの言うとおり、今度は赤くなったライダーの怪物は銃を装備し、水と火の弾丸を放つ。さらに、ミサイルランチャーとガトリングガンを発射する。

パッション「本当に赤くなった」

メロディ「今度は火と水の球が来るわ」

タルト「おまけにさっきのミサイルに加えて機関銃まで来おったわ」
ハミィ「どうやって防ぐんニヤ？」

弾丸が来る中、エルスは携帯電話を持ち、今度は赤と青のツートンカラーの鍵を差し込む

Pエルス「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュッアブレイズ』

今度は右半身が赤で左半身が青の衣装を纏い、赤と青に分かれた三つ編みに赤と青のオッドアイのプリキュア、キュアブレイズに変身した。

ビート「ひっ！？何よ、あの妖怪半分こ女は」

リズム「ビート、これもプリキュアよ」

ビート「これもプリキュアなの！？」

Pブレイズ「まずは炎で叩き落して」

そう言うとう右手から炎が発射し、ミサイルや弾丸を撃ち落とし

Pブレイズ「間に合わないなら」

今度は左手から氷の壁が発生し、弾丸を全てブロックする。

ベリー「炎と氷を同時に使うなんて」

パイン「普通のプリキュアにはそんなの出来ないよ」

Pブレイズ「さて、そろそろ決めてもらうよ」

そういうとブレイズの手には片刃の剣、ブレイズソードを手にし、赤いライダーの怪物の方へ走った。

Pブレイズ「炎と氷の力、受けてみなさい！プリキュア・ブレイズスラッシュー！」

赤いライダーを炎の剣で斬り付けた。そして次の瞬間、剣の軌道が

ら冷気が発生し、瞬時に凍らせて、大ダメージを与えた。これにより白いライダーの怪人に戻る。

ピーチ「圧倒的だね。これじゃ私のであれば・・・」
Pブレイズ「いいえ、あるわ」

そういうとブレイズはパイレーツの姿に戻り、ピーチ達に言葉をかける

パイレーツ「止めは貴方達に任せる。私では玩具ごと破壊しかねないのでな」

パイレーツの言葉を聞いてピーチ達は皆に言葉をかける

ピーチ「解ったよパイレーツ。後は皆で決めるよ」

そういうとピーチはロッド型の武器、ピーチロッドを出す。そしてベリーは剣型の武器、ベリーソードを出し、パインは笛型の武器、パインフルートを出し、パッションはハープ型の武器、パッションハープを出す

メロディはピンクのスティック型の武器、ミラクルベルティエを、リズムは白いスティック型の武器、ファンタスティックベルティエを、ビートはラブギターロッドが変形した武器、ソウルロッドを召喚する。

そして、それぞれの必殺技を同時に放つ

ピーチ「皆で決めるよ。届け！愛のメロディ！プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュ！」

ベリー「響け！希望のリズム！プリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュ！」

パイン「癒せ！祈りのハーモニー！プリキュア・ヒーリングプレア
ー・フレッシュユ！」

パッション「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア・ハピネス・ハリ
ケーン！」

メロディ・リズム「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア・
ミュージッククロンド！」

ビート「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア・ハートフルビ
ートロック！」

ピーチ達の必殺技を同時発射しその途中で合成された光線が白いラ
イダーの怪物に命中する

メロディ「決めるよ、三拍子！1！」

リズム「2！」

ビート「3！」

メロディ・リズム・ビート「フィナーレ！」

白いライダーの怪物の周りが爆発し、浄化の光によって、怪物は元
の仮面ライダーフォーゼの玩具に戻る。

怪物が消えたのか、ピーチ達は変身を解く

ラブ「ありがとうございます。貴方のおかげで助かりました」

響「ハミイ達を助けてくれて」

パイレーツ「気にしなくてもいいわ。プリキュアなら当たり前のこと
をしたのだから、それより貴方達に言いたいことがあるわ」

ラブ「何ですか？」

パイレーツ「貴方達は近いうちに400年前に消えた悪夢と戦う事
になる」

響「400年前の悪夢？」

パイレーツ「今はまだ現れないが、時がたてば現れるわ。言いたいことはそれだけよ」

そういうとパイレーツはラブ達とは反対方向へ立ち去ろうとするが

ラブ「あのく、パイレーツまた会えるの？」

パイレーツ「会えるわ。その時は他のプリキュアと一緒にする時に
出会うわ」

そういつてパイレーツは去った。そしてこれからの方針を話す。

タルト「これであの化け物は去ったわ。早い所、ここから去ります
わ。シフォンはんもおびえておるし」

ハミィ「そうニヤ。早くここから去るんニヤ。怖いのは勘弁ニヤ」

奏「そうね、ほかの皆も心配しているし」

せつな「何か嫌な予感がする。急いで集合場所の広場へ行きましょ」

そして、ラブ達と響達は集合場所である博物館前の広場へ向かうの
であった。

戦闘後編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、集合場所に近いG O G O組とS S組の背後に豪快な巨人も
どきの怪物が・・・

予兆 5 g o g o & S S 編(前書き)

戦闘開始の前触れ。 のぞみ達と咲達編です。

予兆 5 g o g o & S S 編

商店街にてラブ達と響達はフォーゼもどきの怪物を倒した。

その頃集合場所である広場に近い5 G O G o 組とS S 組はというと、広場へ行く途上で会話をしていた。話題はスターオーシャンミュージアムのことを話していた。

のぞみ「本当にすごかったよ。スターオーシャンミュージアムの展示物は」

うらら「そうですね。古今東西のいろんな物が取り揃えてて、いずれも見る価値がありました」

舞「私は宇宙の物がよかったわ。ミュージアムのプラネタリウムもよかったし、ここでスケッチしたかったわ」

咲「舞、ここでスケッチしたら迷惑掛けるよ。あたしは動物かな。とくにライオンのは迫力があってよかった」

りん「あたしは宝石かな。どれもきれいだったし。今度のアクセサリ作りの参考にしようかな」

こまち「私は古代の書物よ。昔の人はどんな物語を書いていたのか気になってたから」

かれん「私は医療よ。医療の歴史を見て思ったの。昔の人はこういう風に治していったんだと」

のぞみ「そうか、じゃあ私は・・・」

くるみ「待ちなさい！」

のぞみが言おうとする所をくるみが突っ込みをいれた

くるみ「あんたの場合は土産コーナーのお菓子が気になるんですよ」

のぞみ「ぎくっ！だって土産コーナーのお菓子はおいしそうだったんで・・・」

くるみ「まったく、食意地張っちゃって。まあ、デザート王国でも同じことだったんだし」

のぞみ「でも、その時のくるみだってお菓子のこと気になってたでしょ」

くるみ「うっ！まあ、否定は出来ないわね」

のぞみとくるみの会話を聞いて咲と舞が話に入ってきた

咲「デザート王国？一体何の事？」

のぞみ「咲ちゃん、何か気になるの」

咲「まあ、何か美味しそうな国じゃないかと」

のぞみ「そうだよ。ここはお菓子が美味しい王国なの。ただ、ちょっと私には嫌な思い出があるの」

咲「嫌な思い出？」

くるみ「まって、咲。ここは私が言うわ。ここへきた時ののぞみはちょっと嫌な事があったの」

舞「それは一体」

くるみ「それは、ココ様がムシバーンという男に洗脳されて敵になつていたの」

咲「洗脳！？」

くるみ「そして、のぞみはココ様を戦う羽目になってしまったの。その時ののぞみは苦戦を強いられてきたけど、のぞみの説得のおかげで正気に戻れたの。そういう意味ではのぞみが羨ましかったわ」

舞「それで、よくいがみ合ってしまったのはこれが原因かしら？」

くるみ「うっ、それに近いわ。後、ムシバーンの戦いで、のぞみはシャイニングドリームになって戦いを繰り広げたわ。そして、戦いが終わった後はムシバーンは満足な心を持って消えて言ったわ。でも、ブラックホールでの戦いでまた現れてしまったわ。その時ののぞみはつらかったわ。あんな形で敵になってしまった事を」

舞「そうだったんですか。のぞみさんにもつらい思い出があるとは

思いませんでしたわ」

のぞみ「舞ちゃん、実はそれだけじゃないの」

舞「どういう意味なんですか？」

のぞみ「私には、りんちゃんやうらら、こまちさんやかれんさん、くるみ、なぎささん達以外にも友達がいたの」

咲「それは誰なの？」

のぞみ「その友達の名前はダークドリーム。シャドウが作り出した私のコピーなの。もちろん、彼女とは戦ったよ。そして和解して一緒に出ようとしてたけど、シャドウの攻撃から私を守るために身代わりになつて散ってしまったの。もし生きてくれたら友達になれたのに・・・」

舞「のぞみさん・・・」

のぞみ「ごめん、明るい話のはずが暗い話になってしまつて」

舞「いいんです。わたしものぞみさんがこついうところがあつたことに驚きましたから」

咲「あたしもよ」

咲達の会話を聞いていたシロップ

シロー「驚いたな。俺の会会う前なのぞみはこういうことにあつていたとはな」

小々田「それもそうだろう。時には喧嘩だつてした事があつたし、いろんな事があつたんだ」

夏「まあ、そのおかげでいろんな事を学んだからな。けど残念だな」

小々田「何が残念なんだ？」

夏「大航海時代の展示コーナーで海賊船の模型が消える騒ぎが起きたんだ。ココ、俺が世界の文化を勉強をしていた事を知っているだろ」

小々田「ああ、そうだったな。その時はナッツは王の事で悩んでいたな」

夏「そうだ。だが、その出来事が会ったからこそ、俺は王の力を使えるようになっていったからな。ん、どうしたシロップ？」
シロー「何か、警官達が集まっているぞ」

よくみるとシローの視線の先には警官が集まっていた。

小々田「すいません。何かあったんですか？」

警官A「何か、パトカーが一台消えたんだ」

夏「パトカーが消えた？」

警官A「はい、そうです。他にもフォーミュラーカーとレースカー、ジェット戦闘機と潜水艦、トレーラーが突如消えたんです」

そしてちようどのぞみ達も警官の所へ来た。

のぞみ「ココ、どうしたの？」

小々田「何かパトカーが消えたという話を聞いたんだ」

小々田が話をしようとしているところを別の警官が来た

警官B「大変です！」

警官A「どうした？」

警官B「博物館にて海賊船の模型が消えました。他にもドラゴンの模型とライオンの模型、ティラノザウルスの模型と侍人形と忍者装束が消えました」

警官の話を聞いて呆けるのぞみ達

のぞみ「海賊船に」

りん「ジェットとトレーラー？」

うらら「レースカーに潜水艦？」

こまち「ドラゴンとライオン？」

かれん「侍と忍者？」

くるみ「パトカーにフォーミュラカー？」

咲「後、ティラノザウルス？」

舞「何か嫌な予感がするわね」

舞がそういうと、突如地響きがあった

かれん「地震？」

うすら「何が起きたんですか？」

地響きを聞いた途端、警官達は逃げいていった。

警官A「何だ、あのデカブツは」

警官B「逃げろ——！」

咲「どうしたんだろう？」

舞「急に逃げるなんて？」

そういうと、突然、のぞみのいる地点が暗くなってきた

こまち「何か、暗いわね。どうかしたのかしら。あらっ、りんさん
顔色悪いわよ」

りん「後ろみてよ、皆」

くるみ「後ろ？」

のぞみ「何があるの？」

後ろを振り向くと、脚が潜水艦とトレーラー、腕がジェットとレー
スカー、そして胴体が海賊船の巨人がいた！

のぞみ「うわっ！！なんじゃこりやああああ！！！」
小々田「何か出た！」
夏「一体何なんだ！？」

そう、この巨人は海賊の戦士がのる巨大兵器を模した怪人だった

りん「これって、ゴーカイ・・・」

うらら「りんさん。この作品にはゴーカイジャーは出ませんよ」

こまち「まさか、これって」

かれん「さっきの警官達が話していた消えた乗り物が合体した物よ」
くるみ「でかすぎよ」

咲「あんなのが暴れたら大変な事になるよ」

舞「このままでは、関係ない人が巻き込まれるわ」

そして咲と舞の携帯から声がした。

????「その通りラピ」

????「はやく止めるチョッピ」

咲「フラッピ、感じたの」

舞「チョッピもなの？」

声の主はフラッピとチョッピ。この二匹は泉の郷の精霊であり、幼い頃の咲と舞に会ったことがあるのだ。

フラッピ「そうラピ」

チョッピ「ほつといたらまずいラピ」

咲「そうだね」

舞「何とかとめないと」

そういうと咲と舞は携帯電話、クリスタルコミュニケーションを手にして、

手を繋いで変身コードを言う。

咲・舞「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

のぞみ「私達も行くよ！」

りん・うらら・こまち・かれん・くるみ「「「「Yes!」」」」

「

そういうとのぞみ、りん、うらら、こまち、かれんは携帯電話に似たアイテム、キュアモのキーボタンを押し、変身コードを言う

のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん「「「「プリキュア・メ
タモルフォーゼ!」」」」

くるみはパレットに似たアイテム、ミルキィパレットに筆を触れさせ、変身コードを言う

くるみ「スカイローズ・トランススレイト！」

そういうとのぞみ達と咲達は光に包まれ、衣装や髪型が変化する。

のぞみは蝶と薔薇の意匠を入れたピンクの衣装を纏い、髪は腰まで届くほどのロングヘアになりツーサイドテールがリング状に変化し薔薇の髪飾りが装着する、りんは蝶と薔薇の意匠を入れた赤の衣装を纏い、髪は前髪が生えた赤いショートヘアに変化し、うらはは蝶と薔薇の意匠を入れた黄色の衣装を纏い、髪は猫の耳の様なシニヨン風の髪に、先端は細いカールした髪になり根元には薔薇の髪飾りがつける、こまちは蝶と薔薇の意匠を入れた緑の衣装を纏い、髪は増量したショートボブに二つに分かれて長くなつた襟足に蝶と薔薇

の意匠を入れたカチューシャを着けて、かれんは蝶と薔薇の意匠を入れた青の衣装を纏い、髪は長いポニーテールに変化し。ポニーテールは根元には蝶と薔薇の髪飾りが装着する、そしてのぞみ達の胸には蝶を模したブローチが装着する。くるみは白と紫の衣装を纏い、ウェーブのかかったツーサイドテールに青い薔薇の髪飾りを装着し、胸元には青い薔薇が装飾される。

光に包まれた咲と舞は

咲「花開け大地に！」

舞「羽ばたけ空に！」

との掛け声と同時に咲は赤紫色の衣装を纏い、髪はショートのパニーテールに変化し、舞は銀白色の衣装を纏い、髪は紫のパニーテールに変化する。そして、咲と舞の腰にクリスタルコミュニケーションが装着される

そして、華麗なる衣装を纏ったのぞみ達と咲達は地上に降り立ち、名乗り口上を言う

のぞみ「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

りん「情熱の赤い炎、キュアルージュ！」

うらら「弾けるレモンの香り！キュアレモネード！」

こまち「安らぎの緑の大地・・・キュアミント！」

かれん「知性の青き泉！キュアアクア！」

くるみ「青いバラは秘密のしるし・・・ミルキイローズ！」

咲「輝く金の花！キュアブルーム！」

舞「煌めく銀の翼！キュアイーグレット！」

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズ「希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心、Yes！」

プリキュア5！」「」「」

ブルーム・イーグレット「ふたりはプリキュア！スプラッシュスター！」

ブルーム「聖なる泉を汚す者よ！」

イーグレット「アコギな真似はお止めなさい！」

今ここに邪悪なる者に立ち向かう可愛らしく強い戦士達、プリキュア5と二人はプリキュア、スプラッシュスターが登場した。

彼女達は巨大な豪快な怪物を倒すことが出来るのか？

この戦場の外では、藍色の髪の美女がプリキュア達の様子を見ていた。

???「これがこの世界のプリキュアか、ヤイバの世界や上原大人の世界、皇リイナの世界やジュエルマスターの世界とは違って、どんな力を持つのだろうか」

そして、彼女の胸元にはペンダントのような物をかけていた。そして、このペンダントは今いるプリキュアの前で輝いていた。

彼女と出会うのは先の話である。

予兆 5 g o g o & S S 編（後書き）

なぎさ「何だか知らないけどイライラする」

メップル「何でメポ？」

なぎさ「あんたの声が聞こえそうでしょ！」

ほのか「たしかに海賊戦隊ゴーカイジャーのナレーションがメップルの人とはいえ」

ひかり「過敏すぎます」

次回プリキュア対豪快な怪物戦開始

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編（前書き）

戦闘開始、しかし、今回は街中で暴れるとまずいので広い所へ行きます。戦闘開始は次回になります。

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編

豪快な巨人に対峙する5 g o g oとS S組。豪快な巨人のでかさに驚いていた。

ブルーム「で、でかい・・・」

イーグレット「あの巨人が私達の敵になるなんて・・・」

ルージュ「あのデカブツ、レモネードの誘いで大都会へ行ったときに遭遇したバルーンホシイナー以来だ」

アクア「もしくは私の高原の別荘に現れた山ホシイナーよ」

ミント「信じられないわ。海賊の戦士が乗る巨人が私達を攻撃するなんて」

レモネード「それはありません。この巨人は人々を守るために戦うヒーローが乗る物です。悪いことに使う訳がありません!」

ドリーム「じゃあ、何が起きたの?」

驚くドリーム達を尻目に豪快な巨人擬きは手の砲口にエネルギーを溜め

ローズ「みんな、呆けないで!来るわ!」

ビームを発射する。そして、その光線はドリーム達を襲う。

ドリーム「うわっ!」

ブルーム「激しすぎるよ」

ルージュ「当たったら一たまりもないよ」

光線の脅威に晒されるドリーム達

ミント「それより、ここで戦ったら関係のない人が巻き込まれるわ」
イーグレット「そうね。ここで戦うのは得策じゃないよ」

アクア「それに、ここではココ達も攻撃に晒されるわ」

ローズ「確かに。流れ弾で街の被害を増やすわけには行かないわね」

光線の砲撃に悩ませる中、空から、声がした

???「ドリーム！」

レモネード「その声、シロップですか」

ドリーム達の前に現れたのは橙色の燕、それがシロップの本来の姿の一つである。シロップは普段はペンギンに似た容姿だが、大きな燕の容姿の時はドリーム達を乗せる移動手段として使われるのだ。

シロップ「そうだロプ」

ローズ「シロップは無事ね。ココ様とナッツ様は」

???1「大丈夫ココ」

???2「こつちも無事ナツ」

シロップの背中席にはココとナッツがいた。容姿は本来の姿であるスピッツ犬とリスに似た姿になっている。

ドリーム「よかった。無事だったんだね」

ミント「ナッツさん。怪我をしないで済んで」

安心するドリームとミント。そしてココ達はある提案を言う

ココ「ここで戦うのは駄目ココ。広いところへ行くココ」

ドリーム「広いところってどこなの？」

ココ「広場より少し北に星海海岸があるココ。そこへ誘うココ」
ミント「でも、ここは人がいるところだけど大丈夫？」

ナッツ「大丈夫ナツ。この時期は人がいないから大丈夫ナツ」

ローズ「そうね、人がいないなら安心ね。みんな、一度、ここへ離脱して、海岸へ誘い込むのよ」

ローズの号令でシロップに乗り込むドリーム達。S S組は自力で何とかしようとするが

ブルーム「あたし達は自力で飛べる形態があるから大丈夫だけど」
イーグレット「駄目よブルーム。距離があるから。ここはシロップに乗りましょ」

やや距離があるという理由でブルーム達も乗り込むことにした。

シロップ「全力で飛ぶロプ」

ドリーム達を乗せたシロップは豪快な巨人擬きの手から一時逃げることにした。目的は海岸へ誘い込む為である。シロップの様子を見た巨人擬きは、突如、巨人にある扉を全てあけた。胴には竜の首、手は竜の翼、足には竜の爪が出現した。そして、巨人擬きもまた飛行を開始した。

シロップに乗って逃走しているドリーム達

ルージュー「とりあえず逃げてはいるんですけど、一体どこへ向かっているんですか？」

アクア「星海海岸と言う所よ。夏場は人がにぎわっているけど、今の時期は人がいないのよ」

ルージュ「そうなんですか、もし夏場に訪れるのでしたら水着持ってくださいかなって」

アクア「水着ね、それも悪くないわね」

ルージュとアクアの話をしている中でブルーム達は海岸の事の出来事を思い出していた。

ブルーム「話聞いてみると夕風海岸を思い出しそうナリ」

イーグレット「そうね、海岸にはいろんな事がありますから」

ブルーム「そうなのよ、何かフラッピとチョッピが海へ遭難したとか、ハナミズターレが海の家の人をやっていたり、後、満さんと薫さんが海岸で死闘を繰り広げたとか色々あったね」

ブルーム達が話をしている所をローズが声を掛ける

ローズ「はいはい、話するのもいいけど、本来の目的を忘れちゃうわよ」

ブルーム「あつ、そうだね。でも、都合よく来るのかな」

ブルームがぼやく頃、後ろにいるレモネード達は驚いていた。

レモネード「皆さん、後ろを見てください」

ドリーム「後ろ？」

ミント「何かいるのかしら？」

レモネードの視線には竜と融合した巨人擬きが追跡してきた。

ミント「やっぱり、追ってきたみたいね」

ドリーム「でも、どうやって竜をいれたの？」

レモネード「最初に現れた時は海賊船とジェットとトレーラーとリースカーと潜水艦しかありませんでしたが」

ミント「博物館の中にあつた竜の剥製を入れたのよ」

ドリーム「なるほど。って何か竜の口から何か吐き出してくるよ」

ドリームの言うとおり竜の口から、火球を吐いた。しかし

ミント「この攻撃はシロップ狙いね。けど」

そういうとミントは両手を交差し、周りにミントの風を吹いた後、上げた手から緑の円盤を召喚した

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー！」

そして、そのソーサーを盾にして火球を防いだ。

ミント「私がいる限り、シロップには当てさせないわ」

その後も巨人擬きの攻撃を防ぎまくるミント。その中、竜の火球は見当違いの方向へ撃った

ドリーム「あれ？これってノーコンなの」

レモネード「わざと外したのでしょうか？」

巨人擬きの行動にかしげるドリームとレモネード。しかし、ルージュとアクアだけは違っていた。

ルージュ「この攻撃、何かありますね」

アクア「ええ、何か目的があるようね」

そして、ローズは上空を見ていた。すると上から何か来る物に気づいた。

ローズ「気をつけて、上から何か来るわ」

ドリーム「上つて、ああ!？」

レモネード「上空から狙ってきました」

何と上に打ち上げてから攻撃してきたのだ。

ミント「しまった、上から攻撃するなんて。でも、ここを外したら、直接攻撃されるわ」

不安を抱くミント。しかし

ブルーム「大丈夫だよミント」

イーグレット「こっちは私達が何とかするわ」

そういうと二人の手に光が集まり、何とバリアを張ってきたのだ。そして、打ち上げた火球を防いだ。

ミント「バリア?ブルームとイーグレットもできるの?」

ブルーム「あたし達は精霊の力を借りる事によってバリアを作り出せるの」

イーグレット「それだけじゃないの。他にも、飛行能力を得たり飛び道具が使えるの。だから、周りは私達がフォローします。ミントは巨人擬きの方向の攻撃を防ぐ事に集中してください」

ミント「解ったわ、二人共お願いね」

ブルーム「任せなさい」

ブルームとイーグレットのバリアを借りる事によって、火球攻撃を防ぐ事に成功したドリーム達。そして数分後

ココ「みえたココ」

ナッツ「星海海岸の上空まで来たナツ」

シロップ「もう、逃亡する必要はないロプ」

ついに星海海岸上空へ着いたドリーム達

ドリーム「よしっ、こつから反撃よ！みんな行くよ！」

ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズ・ブルーム・イーグレット

「「「「「Yes!」」」」」

ドリーム「つてあれ！？なんでさりげなくブルームとイーグレットも言ってるの？」

ブルーム「一度言ってみたかったのドリーム」

ドリーム「はぁ・・・、そんな事より、攻撃をしないと」

ミント「ドリーム、ここは私が先に仕掛けるわ」

そういうと、盾として使われた円盤を巨人擬きへ投げつけた。

ミント「狙うは龍の翼よ」

そう、翼を斬りつけることによって巨人擬きを地面に落としてダメージを与える作戦である。そして命中するが、今度は巨人擬きから竜を出し

ローズ「カウンター、まさか・・・」

何とカウンターでシロップにあて、プリキュア諸共地面に落とされ

てしまう

シロップ「ロプーーーーー！」

ココ「ココー！」

ドリーム「いけないココ達が」

イーグレット「ドリーム、慌てないで」

そういうとイーグレットは水色の羽衣を纏った衣装のプリキュア、キュアウィンディに変身する

ウィンディ「風よ！」

そして、地面に突風を当て、地面にクッションみたいな物を発生し、ココ達を安全に地面に降ろした。

ココ「助かったココ」

ナッツ「ウィンディ、ありがとうナッツ」

地面に無事に降りたココ達を見て安心するドリーム

ドリーム「ウィンディ、ココ達を助けてくれてありがとう」
ウィンディ「気にしなくてもいいわドリーム」

そして、無事に地面に降り立つドリーム達、一方の巨人擬きも地面に降りようとしていた。

ブルーム「そう簡単に地面に降りさせないよ」

そういうとブルームは黄緑の月を連想させる衣装のプリキュア、キュアブライトに変身し

ブライト「光よ！」

黄緑の光を巨人擬きの膝にあて、脚を切り離した。これでダメージを与えるかに見えたが、巨人擬きは脚にフォーミュラカーを接続し、地面にホバリングしながら降りてきた。

ルージュ「こらー！車が飛ぶなああああ！」

レモネード「ここは蟹ではないのでしょうか」

ローズ「レモネード、電王はこの作品には出ないわよ。それにこの形態は何かやばい予感がするわ」

ミント「ひょっとして、完全形態が出たりして」

アクア「ミント、そういうの言わないで。本当に出かねないから」

海岸を舞台に変え、今度は下半身をフォーミュラーカに変えた豪快な巨人擬きがプリキュア達の前に立ちはだかる。果たしてどうなる？

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編（後書き）

次回、豪快な巨人擬き、大暴れ。カンゼンも来るのか？しかし！

湊「次回、私が助っ人に登場よ！」

戦闘中編 5 g o g o & a m p . s S組編（前書き）

豪快な巨人擬き、やりたい放題。でも、最後にこの人登場

戦闘中編 5 g o g o & a m p ; S S 組編

下半身をフォーミュラカーに換装した豪快な巨人擬き、その巨人擬きに挑むブライトとドリーム達。

ブライト「下半身を車に換えるなんて、ただ乗せただけでは・・・」
ウィンディ「ブライト、それは言っではいけないよ」

二人の会話を聞き、コミュニケーションの中にいるフラッピとチョッピはブライト達に言葉を言う

フラッピ「ブライト、くるラピ」
チョッピ「気をつけるチョピ」

ゴーオン擬きの突進がブライトたちを襲う。

ブライト「うわっ！」
ウィンディ「早い！」

ゴーオン擬きのスピードに翻弄されるブライト達。しかし、アクアは冷静に見ていた。

アクア「確かに早いけど、このスピードは平地だからこそ発揮できるのよ」

ミント「じゃあ、どうするの？」

ローズ「決まっているわ。要するに走りづらくすればいいのよ。ここをでこぼこ道にすればスピードは落ちるわ」

ミント「それはいいけど、どうやってここをでこぼこ道にするの？」
ローズ「ミント、ここは私に任せなさい」

アクア「ローズ、貴方、何か手があるの？」

ローズ「勿論、あるわ。見ていなさい」

そういつとローズはゴーオン擬きが走る道の前に立った

ローズ「暴走車はここで止まりなさい！」

そういつとローズは拳を地面を叩くと、小規模のクレーターが出来た。クレーターに突っ込んだゴーオン擬きは縦回転しながら宙に浮いてしまった。

ブライト「出た、ローズ必殺のクレーターパンチ・・・」
ウィンディ「相変わらず強烈ね」

クレーターパンチの威力に驚くブライトとウィンディ

ローズ「今よドリーム！」

そういつとドリームはゴーオン擬きの所へ走り、両手をクロスし、手にピンクの光を纏う。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

そして、一度、後方へ飛んだ後、両手をクロスし、ピンクの光を纏いながら、ゴーオン擬きへ突進した。そして、ゴーオン擬きをバラバラにした。しかし・・・

レモネード「バラバラになったのはフォーミュラーカーだけですね」

バラバラになったのは六つのパーツに分けられたフォーミュラーカ

ーだった。そして、離脱した巨人擬きの下半身には赤いライオンが出現した。そして、そのライオンの爪が空中で無防備になっているドリームを襲う。

ルージュ「ドリーム、気をつけて！」

ドリーム「えっ？」

ライオンの爪がドリームの背中を襲い

ドリーム「キャアアアアア！」

地面に叩きつけられてしまう。ドリームの背中には、衣装とインナーを切り裂いて出来た傷が出来ていた。ルージュは負傷したドリームに近づく。

ルージュ「ドリーム、大丈夫？」

ドリーム「大丈夫だよルージュ」

ルージュ「無理しないで！あんたの傷、相当酷いから」

ドリーム「解っているよ。でも動きに支障ないから」

そういうと、ドリームはガオゴーカイオー擬きになった巨人擬きに対峙する。しかし、背中に血を流しているドリームを見たローズは

ローズ「ドリーム、無理しないでよ・・・」

そして、ドリームの様子を見て、不安を抱いたルージュは他の皆に声をかけた

ルージュ「ドリームを無理するわけには行かない。皆、ドリームのフォローに入ってあげて」

ミント「解ったわ」

ルージュの呼びかけでドリームを援護しようとするが、レモネードは巨人擬きの妙な様子に気づいていた。

レモネード「ルージュ、まってください！巨人擬きが何かします！？」

レモネードの言う通り、巨人擬きの胸は全開に開き、中から、パトカーと緑の忍者が飛び出した

ルージュ「何あれ！？なんでパトカーと忍者が出るの？」

アクア「成程、この中にパトカーや忍者、竜を仕込んでいた訳ね」

驚くルージュの前にパトカーが突っ込んでくる。

アクア「ルージュ！避けなさい！」

アクアの言葉を聞き、パトカーの突進を避けるルージュ

ルージュ「あのパトカー、何て乱暴かしら？」

アクア「こんな運転、間違いなく免許停止確定よ。あんな車、早く振り切ってドリーム達の所へ行かないと」

しかし、パトカーのスピンをしながらの射撃の前にルージュとアクアは足止めされてしまう。

ルージュ「くっ！これではドリーム達の所へ行けない」

苦戦するルージュとアクアを救うため、レモネードが援護へ行くが

ミント「レモネード、上に敵が」
レモネード「敵？」

上空から緑の忍者が襲い掛かる。しかし、レモネードは間一髪避ける事に成功する。

レモネード「危なかった」

ミント「あの忍者、私達を足止めするつもりね」

レモネードとミントの前に忍者が立ち塞がる

レモネード「ですが、一人なら何とかできます」

ミント「そうね、協力して行きましょ」

しかし、レモネードとミントの思惑とは裏腹に忍者は何と分身した。

レモネード「分身？そんなのありますか？」

ミント「多すぎるわ。でも、何とかしないと」

レモネードとミントは大量の忍者によって足止めしてしまう。

ブライト「ルージュたちが足止めされてる」

ウィンディ「こうなったら、私達がドリームの元へ行かないと」

足止めされてしまったルージュたちを見たブライト達は急ぎドリームの所へ向かう。しかし、その行動は突如、地面から現れたドリル付きのティラノザウルスによって邪魔されてしまう。

ブライト「何でこんな時に恐竜が出てくるのよ」

ウィンディ「あの恐竜、私達を足止めするつもりなの!？」

そして、恐竜の口から光線を放ち、ブライトとウィンディを襲う。

ブライト「ちよっ!何あの光線は」

ウィンディ「当たったら、ひとたまりもないわ」

恐竜の襲撃によって足止めされたS S組。それぞれのメンバーがパトカー、忍者、恐竜によって足止めされてしまう。そして、ガオ擬きに対峙するドリームとローズは

ローズ「まずいわね。皆、足止めされてるわ。脚が四足ではクレイターパンチは効果が薄いし、ドリームは怪我をしている、どうすればいいの」

ガオ擬きは容赦なくドリーム達を襲う。必至に避けるがドリームは怪我の影響で動きが鈍い。

ドリーム「早い。やっぱり無理は出来ないか。皆には心配したくないのに・・・」

動けないドリームにライオンの爪が襲おうとする。

ローズ「ドリーム、避けなさい!」

ドリーム「わかってる、ってうわっ!」

背中 of 激痛で鈍ってしまうドリーム。そこをライオンが襲う。もし当たれば致命傷になってしまうその時

???「プリキュア・ストライクスパ!」

光の槍がドリームを襲おうとしたライオンの額に命中し、ガオ擬きは後退した。

ドリーム「今の攻撃は一体？」

ドリームは光の槍を投げた人に視線を向けた

ドリーム「あの人は一体？」

ドリームを助けたのは赤い衣装を纏い、赤い長髪をした眼帯の少女だった。その少女を見て、敵が及ばないところに居たココは驚いていた。

ココ「君は一体、何者ココか？」

ココの質問に答える少女

???「安心なさい、私は味方よ」

少女の返答を聞いて、今度はナッツが少女に質問を言ってきた。

ナッツ「どうして、ドリーム達を助けたナツか？」

ナッツの質問に答える少女

???「貴方達を守りたいからよ」

ドリームを救った少女に視線を向けるドリーム達、するとブライトが少女に声をかけた。

ブライト「あんたは一体、何者なの？」

そついうと少女はブライトの質問に答えた

???「教えてあげるわ。私の名は」

???「変革をもたらす自由の海賊！キュアパイレーツ！」

ドリーム「キュア・・・」

ローズ「パイレーツ？」

ドリームを救ったのはキュアパイレーツと言うプリキュアだった。
彼女の参戦によりドリーム達は反撃に移ろうとしていた。

戦闘中編 5 g o g o & a m p ; S S組編（後書き）

パイレーツ「次回、カンゼンゴーカイオー擬き、出現よ。でも、貴方達には素敵な出会いをもたらすわ」

ドリーム「どういう意味なの？」

パイレーツ「次回のお楽しみよ。ヒントは貴方の知っている友達よ」

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編（前書き）

もっとも長い話かもしれない。詰め込みすぎたか・・・
カンゼンは次回になります

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編

豪快な巨人擬きの攻撃にさらされている上に、巨人擬きの胸から現れた忍者とパトカー、さらに地中から現れたドリル付きの恐竜によって足止めされたプリキュア達を救ったのは赤い衣装を纏った海賊の戦士、キュアパイレーツだった。

ブライト「あんだ、あたし達を助けに来たの？」

ブライトの質問に答えるパイレーツ

パイレーツ「そうよ。だから今から、貴方達を助けるわ」

パイレーツの言葉を聞いて、質問を言おうとするココ

ココ「相手は恐竜と忍者とパトカーと豪快な巨人擬きだココ。どうやって戦うココか？」

するとパイレーツは携帯電話と鍵に似た物を出して、鍵を電話に指した。

パイレーツ「これを使うわ。プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アエクス！」

パイレーツは交差した翼を持ち、右手に剣を持った紫のプリキュア、キュアエクスに変身した。そして

Pエクス「行くわよ。トランスモード！」

そしてエクスのは赤く光り、右手のエクスソードを展開し、恐竜と戦っているブライトの所へ向かった。

その頃のブライトは光線とドリル付きの尻尾に悩まされていた。

ブライト「あの光線、きついナリ」

ウィンディ「かと言って、近寄ればドリル付きの尻尾が襲ってくるわ。どうすれば・・・」

不安を抱くブライト達の前に、赤く光ったプリキュアが横切った。

Pエクス「ここは私に任せなさい」

ブライト「あんたは一体？」

Pエクス「貴方達の味方よ」

ウィンディ「味方？」

Pエクス「そうよ、貴方達、今から私の戦いを見なさい」

そういうとエクスは両手にピンク色の光を放つ剣を出し、恐竜擬きを斬りつける。

Pエクス「プリキュア！エクスサーベル・ハリケーンスラッシュ！」

神速の如く、恐竜擬きを切り刻むエクス。さらに

Pエクス「喰らいなさい！プリキュア・エクスダガー・スピア！」

二本の短剣が、恐竜の両目に命中し、視界を塞いだ。視界を塞いだ事によって混乱する恐竜擬き。さらに、ライフルモードに変形したエクスソードを恐竜擬きの腹に突き刺し、弾丸を内部へ撃ち込んだ。

P エクス「プリキュア！エクスソード・フルブラスト！」

恐竜擬きは腹のダメージを受けて、倒れた。そして、再び剣形態に変形したエクスソードで敵を切り裂こうとした。

P エクス「止めよ！プリキュア！エクスソード・スラッシュ！」

エクスソードの一撃で倒れる恐竜擬き。しかし、恐竜擬きは倒れていた。

P エクス「後は貴方達が止めを刺して。私では破壊されるから」

パイレーツの言葉を聞いたブライトとウィンディは手を繋ぎ、必殺技の体制に入った

ウィンディ「精霊の光よ、命の輝きよ！」

ブライト「希望へ導け、2つの心！」

そして、二人の手に精霊の光が集まり、その光を両手で押し出して発射する

S S 組「プリキュア・スパイラル・スター・スプラッシュ！」

その光は恐竜擬きに包まれ、消滅する。

P エクス「今のうちよ！早くドリームの元へ行きなさい！」

ブライト「あんたはどうするの？」

P エクス「他の皆を助けに行くわ」

そういうとエクスは今度は忍者擬きの所へ向かった。その忍者擬き

の所で苦戦しているレモネードとミントはと言うと

レモネード「数が多すぎます。レモネード・フラッシュつかっても
きりがありません!」

ミント「ナイトメアの戦いに使った技は、今はローズパクトの力のおかげで威力が上がっているけど、それでもきついわ」

苦戦しているところをエクスがやってくる

Pエクス「心配しないで、ここは私が何とかするわ」

レモネード「貴方は一体誰なんでしょうか?」

ミント「私の味方なの?」

Pエクス「安心して、私は味方よ(しかし、数が多いな)」

そいうとエクスは黄色のプリキュアキーを出してきた

Pエクス「忍者にはこれよ。プリキュアチェンジ!」

電子音「キュ〜アボルト!」

今度は黄色の雷のプリキュア、キュアボルトに変身した。ボルトの手には雷を纏った十字手裏剣を持っていた。

Pボルト「斬り裂け!プリキュア・ライティングクロス!」

十字手裏剣を投げつけ、忍者共をまとめて倒すが、忍者はさらに分身する。

Pボルト「分身するとは小ざかしいわね。ならば」

そいうとボルトは分身で対抗し、全方向から電撃を放った。

Pボルト「まとめて消し去ってやるわ。プリキュア・ライジングサ
ンダー！」

全方向からの電撃によって大量の忍者はほとんど消し去った。そし
て、残った忍者はと言うと

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン！」

光の鎖によってまとめて捕まえた。

Pボルト「鎖だけで敵を捕獲するとはやるようね」

レモネード「ありがとうございます。貴方もやりますね。ミント、
止めをお願いします」

ミント「解ったわ！」

そして、ミントの手には緑の円盤が形成され、敵に投げつけた

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー！」

その円盤によって、忍者は両断され、忍者は消滅した。

レモネード「助かりました！」

ミント「ありがとう、助けてくれて」

Pボルト「気にしなくていいわ。それより、早くドリームの所へ行
きなさい」

レモネード「解りました」

ミント「無理しないでください」

そついうとボルトは今度はパトカーに苦戦しているルージュとアク

アの元へ向かった。その頃のルージュとアクアはというと

ルージュ「ゴーオン擬きには劣るが厄介ですね」

アクア「そうね。車輪から撃つ弾丸は厄介ね。少しずつ削られるのは痛いわ」

弾丸攻撃によりルージュとアクアの機動力は少しずつ削られていた。特にアクアは脚が露出しているせいで傷が目立っていた。

アクア「いくらプリキュアの力があるとは言え、当たり前続けると痛いわ」

ルージュ「しかし、パトカーはしつこいみたいです。何とかならないのかな」

ルージュがばやくとボルトがルージュ達の前に現れた

Pボルト「下がりなさい。無理をすれば大変な事になるよ」

ルージュ「誰なのあんた？」

Pボルト「私は貴方達の味方よ」

アクア「味方？じゃあ、私達を助けるの？」

Pボルト「そうよ。だから、貴方達は一度下がって回復に努めなさい。ここは私に任せなさい」

アクア「わかったわ」

ルージュとアクアを下げさせると、ボルトは赤色のプリキュアキーを取り出し、携帯電話に挿した

Pボルト「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アウイング」

今度は赤い装甲を纏い、ヘルメットを装備したプリキュア、キュアウイングに変身した。

Pウイング「警察車両にはそいつで勝負よ！」

そういうとウイングの右手には銃型武器、ウイングショットが、左手にはウイングソードを装備し、パトカーに挑んだ。

パトカーはビームや銃弾でウイングを襲うが、ウイングには通用しなかった。傷が付いていないウイングを見て驚くルージュとアクア。

ルージュ「あれだけの銃弾受けて、傷一つ付いていないなんて」

アクア「あのプリキュアの防御力、相当高いようね」

銃弾を防いだウイング。そしてウイングはウイングショットとウイングソードを合体し大型銃にした。そして、腕のウイングブレスに番号を入力し、発射準備に入った。

電子音「8・8・9」

Pウイング「プリキュア・ウイングバスター！」

ウイングバスターから光線を放ち、パトカーを転倒させる。そしてウイングはルージュとアクアに声をかける

Pウイング「二人共、止めは貴方達に任せるわ。もう回復したでしょ」

ウイングの声を聞いたルージュとアクア

ルージュ「アクア、立てますか？」

アクア「大丈夫よルージュ」

ルージュ「そうか、じゃあ、はやくあのパトカー黙らせて上げましょうか」

アクア「そうね、ドリームとローズの二人心配しているから」

そういうと二人は両手を交差し、ルージュは炎、アクアは水を発生した

ルージュ「プリキュア・ファイアーストライク！」

アクア「プリキュア・サファイアアロー！」

掛け声と同時に、ルージュは炎のボールを出し、サッカーボールの要領でけりだし、アクアは水で出来た弓矢を作り、水の矢を放った。そして、炎と水は合成され赤と青の光線になってパトカーに当てる。そしてパトカーは消滅した。

Pウイング「二人共いいコンビネーションね。凄いわ」

ルージュ「照れるわね」

アクア「そう、ありがとう」

Pウイング「わかったなら、早くドリームの所へ行きなさい。皆もそこへ行ってるわ」

ルージュ「そうね、はやくドリームの所へいきましょ。あんたもドリームの所へ行くんでしょ」

Pウイング「当然よ。私は先に行くから、あとで来なさい」

ルージュ「解ったわ。ドリームの方、頼むわよ」

ウイングはドリームの所へ向かった。そのドリームの所はガオゴークイオー擬きに苦戦していた。

ローズ「ドリーム、あんた怪我しているでしょ。下がちなさい」

ドリーム「でも、ローズだけでライオン擬き倒せるの？」

ローズ「舐めないでよドリーム。私は赤い薔薇の力五人分の力があるのよ。それくらい敵なんて大した事はないわよ。だから心配はしなくてもいいのよ」

ドリーム「ローズ（でも、ローズだって限界よ。私が怪我をしなければ皆に迷惑をかけずに済んだのに・・・）」

珍しく弱気になるドリームの前に、赤い装甲のプリキュアが現れる

Pウイング「大丈夫よ。貴方は一人じゃないわ」

ドリーム「あんたは？」

ドリームの質問を聞いたウイングは一度パイレーツに戻る

パイレーツ「私はキュアパイレーツ。貴方達の味方よ」

ドリーム「あんたがキュアパイレーツ。それじゃ」

パイレーツ「当然よ。ドリーム、ここからは私が手伝うわ。それに皆もここへ来るわ」

ローズ「じゃあ、皆も来るの」

パイレーツ「そうよ。だから、皆が来るまで持ちこたえましょ」

そう言うとパイレーツは携帯電話を出し、橙と紫のツートンのプリキュアキーを出した。

ドリーム「この鍵は一体何？」

パイレーツ「見てなさい。これが私の戦いよ。プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アガイア！」

今度は右半身が橙で左半身が紫の衣装を纏い、橙と紫に分かれたボブカットに橙と紫のオッドアイのプリキュア、キュアガイアに変身

した。

ローズ「何！？このプリキュアは」

Pガイア「これはキュアガイア。別の世界に存在するプリキュアでこの世界には存在しないプリキュアよ」

ローズ「どういう意味なの？」

Pガイア「後で教えるわ。今はこの戦いに勝利しましょ」

ローズ「そうね」

ガオゴーカイオー擬きに対峙するドリーム、ローズ、ガイア。しかし、ガイアは

Pガイア「先に攻撃を仕掛けるわ」

そういうとボウガン型の武器、ガイアボウガンを召喚し、上へ向けて矢を放った

Pガイア「プリキュア・ガイアレイン！」

そして上から水を纏った石の矢が大量に降ってきた。ガオ擬きに命中し、そしてドリームにも命中した

ローズ「どうしてドリームに当てるの？」

Pガイア「理由はあるわ。よく見なさい」

すると、ドリームの傷が治り、衣装の損傷も直してしまった。

ローズ「嘘！ドリームの傷が治った」

Pガイア「これはプリキュアに対しては回復効果を与えるの。ドリーム戦える？」

ドリーム「うん、大丈夫だよ」

Pガイア「そう。なら大丈夫ね。さあ、行くわよ」

ドリーム、ローズ、ガイアはガオ擬きと交戦する。万全に回復したドリームによって戦況は逆転する。

ドリーム「はあっ！」

ドリームの拳がライオンの頭にあてライオンは昏倒する。

ドリーム「今よ！パイレーツ！」

そしてガイアはガイアボウガンから水を纏った岩槍を放った。

Pガイア「プリキュア・ガイアチエイサー！」

岩槍があたり、ライオンはバラバラになったかに見えた。しかし、今度はシンケンゴークァイオー擬きと化した

ローズ「今度は侍。これ以上はまずいわ」

ドリーム「大丈夫だよローズ」

そう、遅れてきたルージュたちもドリームの元へ着いた。

ルージュ「ドリーム、ローズ遅くなって御免」

ドリーム「皆、無事なんだね」

ルージュ「ああ、パイレーツのおかげよ」

Pガイア「皆、揃ったわね。行くわよ！」

ついに集結したプリキュア達。いよいよ豪快な巨人擬きの決戦が始

まる。

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編（後書き）

次こそ、カンゼンゴーカイオー擬き出現。しかし、夢の競演を見逃すな。

一言言おう。虎キチさんが喜ぶ五人組登場ですよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6079x/>

プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

2011年11月20日14時01分発行